明治二十九年八月二十日發行

女鑑

第百拾五號

東京國光社

女鑑第百十五號

目録

洛陽の貞女



吾人の希望

吾人の希望は、一にして足らず。一々、これを言はんとするも、かぎりある紙面の、豈、一朝一夕に、よく述べ盡し得べきものならんや。自今、折にふれ、時につけて、これを言ひもし、これを述べもせん。今は、たゞ、その切なるものといはんよりは、寧、『言ふべくして行はるべきもの』を述べて、以て、大方にはからんとす。

されば、こゝに、吾人の希望といへばとて、敢て、高遠雄大なるものにもあらず。また、斬新奇拔なるものにもあらず。かの『言ふべくして行はるべきもの』と信ずるもの、即、女子の中等教育を盛にせんこと是なり。即、各府縣にて、少くも、一个處以上の高等女學校、若くは、これと同等の各種女學校を興して、これを、府縣立となし、嚴肅なる監督の下に、完全なる教育を施して、女子の中等教育を盛にせんこと是なり。目今、各地にて、中等教育を盛にせんとする氣運は、實に、非

常にして、各府縣、中學校增設の美擧あるを見ること頻々なるも、而も、これ、みな、男子のためのみにして、一も、女子のための設備あることを聞かず。吾人、いかでか、女子敎育のために歎かざらん。あはれ、女子の中等敎育、あに、ゆるかせにすべきものならんや。この時に當りて吾人が各地、中等敎育を盛にせんとする氣運の非常なるに乘じて、女子のためにも、亦、中等敎育的各種學校の設立をはかること、いかでか、空論といふべけん。吾人は、女子のために、その中等敎育を盛にせんことを謀るは、今日を以て、最、好機會と信ずるものなり。

今、全國各府縣につきて、女子の中等敎育、および、それ以上の各種學校の數を取調ぶれば、實に、左に示すところの如し。即、

府縣尋常師範學校に女子部の設ある府縣

千葉、栃木、長野、山梨、石川、富山、
新潟、福島、宮城、山形、秋田、京都、
大坂、和歌山、岡山、山口、島根、鳥取、

德島、　香川、　高知、　長崎、　佐賀、　福岡、
鹿兒島、

公私立專門及技藝學校（女生徒を有する）の設ある府縣

東京（私立四）　石川（縣立一）　新潟（私立一）　京都（市立一）　大坂（府立一）

公私立高等女學校の設ある府縣

東京（公立一 私立一四）　栃木（公立一）　三重（私立一）　滋賀（私立一）　福井（公立一）
京都（公立一）　大坂（公立一）　和歌山（私立一）　廣島（私立一）　山口（私立一）
鳥取（私立一）　香川（私立一）　高知（公立一）

東京には、右のほかに、華族女學校と、女子高等師範學校、および、その附屬高等女學校とあり。

女子の中等教育的學校の設なき府縣

神奈川、　埼玉、　茨城、　群馬、　靜岡、　三重、
岐阜、　岩手、　青森、　奈良、　兵庫、　愛媛、

熊本、　大分、　宮崎、　沖繩、　北海道、

右は、最近統計年鑑によりたるものなれども、文部省最近學事年報によれば、その後、多少の異動ありたるものゝ如し。されども、大數の上にては、さしたることなければ、梗槪を知らんには、これにて十分ならん。あゝ、前表の示すところを見れば、神奈川以下十六縣、一道廳管下の女子は、表面上、その管內にて、中等敎育を受くることを能はざるものなり。吾人、いづくんぞ、是等の女子のために、その不幸をかなしみ、我が國前途のために、長大歎息せざるを得んや。また、いづくんぞ、切に、府縣立高等女學校設立を希望せざるを得んや。

たとひ、男子のためのみとはいへ、各地方にて、中等敎育を盛にせんとする氣運にむかひたるは、まことに、こよなき慶象にして、吾人、歡喜して措くところを知らざるなり。而して、中等敎育を盛にせんとするには、もとより、種々の目的あるべしといへども、詮ずるに、忠良なる國民を養成して、いかなる場合にも、國光を輝し、國威を揚げしめんとするに外ならざるべし。否、これを以て、必到の

目的とせざるべからず。而して、この目的を達せんとするには、男子の教育を隆ならしむるのみに止らずして、その、必、女子教育にまつあること、實に、莫大なるものあるを知らざるべからず。現代にて、女子教育を隆にし、以て、盛に、良妻、賢母を養成するにあらずば、いかでか、次期に、多數の忠良なる國民を得べき。是、吾人が、切に、府縣立尋常中學校と、府縣立高等女學校とを併置し、男女教育を並び進ましめんことを希望する所以なり。

終にのぞみ一言せん。今日、なほ、一私立女學校だになき府縣にては、はやく、これを設立し、私立女學校ある府縣にては、これを上せて、府縣立とし、若くは、これに、保護監督を加へて、管内の女子教育の進歩をはかれかし。且、尋常師範學校女子部の設なき府縣にては、現今の東京府立高等女學校の制度の如く、小學教員たらんとする志望者をば、高等女學科卒業の後、一年、若くは、二年間、なほ、留校せしめて、これに、小學教員に必要なる學科を授けなば、忽にして、恰好なる小學女教員を得ん。是、實に、一擧して、兩得するものにあらずや。

論説

女流文學者に望む

藤田止戈三

方今、女流文學者の出づること、あだかも、雨後の春筍のごとく、その一雨々々ごとに、殖え行くことの盛なるさまは、我が國古今の史上に、おほく見ざるところなり。かの清紫泉染等の才女、名媛、一時に輩出して、たがひに、文思をたゝかはし、かたみに、才情をきそひたりきといふ一條天皇の御宇も、かくやありけんと思ひ出でられて、そゞろにゆかし。而かして、彼と、是とをくらべて、いづれか優り、いづれか劣れりといふことにつきては、こゝに、説明を要せずして、いと明なるべけれど、敢て言はざるべきも、彼が如き先蹤を有する今日の女流文學者は、果して、いかなる地位に立てるものなるか。彼が如き先蹤を有する今日の女流文學者は、果して、いかなる任務を負へるものなるか。吾人、今日の女流文學者に見るに、往々、その已の立てる

地位をわすれ、巳の負へる任務をわすれたるにはあらざるかと思はるゝことなき能はず。豈、ふかく、女流文學者のために惜まざるを得んや。

つら〳〵、今日の女流文學者といふものを見るに、その多數は、文學者とは、韻文か、散文かをものする人なり。韻文とは、新體詩のこと、散文とは、小說のことなれど、新體詩を作るか、若くは、小說を書く人は、猫も、杓子も、皆、文學者なりと心得るものゝ如し。もとより、文學者は、新體詩を作ることあるべし。小說を書くことあるべし。然れども、これのみを以て、文學者の能事足れりとするものあるに至りては、噴飯失笑せざらんするも得ざるなり。ことに、女流文學者の甚しきものにいたりては、世の輕佻無節操の浮薄漢がれくる諂諛的の贊辭にれだてられて、無趣、無味、眞に、活字を羅列したるに過ぎざるが如き小說をものし、靦として恥ぢざるのみか、かへりて、あはれ、われこそは、女流の大文學者ならめと、得々たるものもありとかや。かゝる蹤にいたりては、たゞ、噴飯失笑するのみに止らず、實に、それがために、いたく歎息せずむあらざるなり。

かくいへばとて、吾人は、絕對的に、女流が、小說をものするに、反對を唱ふるものにあらず。たゞ、女流文學者の能事は、小說をものするのみにとゞまらず、なほ、他

に、種々の、その手腕を用うべき餘地あることを述べて、そなたにも、心を向け、意を注がんことを望むに外ならざるなり。一例をあぐれば、我が國の歴史をものするに、假字を以てして、いはゆる――假字書歴史――などを作らんは、最、女流文學者に適するものならんか。かの赤染衛門を見よ。その才筆は、よく、藤原氏極盛時代をうつし得て、千載の下にある吾人をして、身、そのかみにありて、目、直に、藤氏の榮耀榮華を睹るが如き感あらしむる榮華物語の著ありしにあらずや。(但、榮華物語の著者につきては、古來、いろ／＼の異説あれども、今は、その大部分は、赤染衛門が手になりしならんといはれたる伴信友翁の説にしたがひつ。)また、かの伊勢の荒木田麗女を見よ。かれは、實に、熱心なる假字書歴史家なりしなり。纎弱の一女子の身を以て、わが國古來より傳れる假字書歴史を整理せんと企てたりき。かの藤原爲業の手に成りきといふ大鏡の前をおぎなはんとては、中山忠親のあらはされたる水鏡あり。その後をつがんとては、一條冬良公の増鏡あり。また、大鏡と、水鏡との間のかけたるをおぎなはんとては、續世繼(著者未詳)の著ありきと雖、なは、闕けたりければ、麗女は、彌世繼、(一名は、月のゆくへ。)を著して、これをおぎなひ、又、別に、池の藻屑といふをあらはして、増鏡の後をつぎたりき。こゝにおいて、神武天皇より、後陽成天

皇までの間の假字書歴史は、はゞそなはるにいたれり。麗女の績、あに、偉とするに足らずや。しかして、後陽成天皇より後、今におよぶまでの事蹟を記して、爲業の志をつぎ、麗女の志をなさんとするもの、今に至りて出でず。これ、吾人が、今日、女流文學者の、林の如く、雲の如くなるをうれしみて、いたく、これに、望を属する所以なり。明治の女流文學者、何ぞ、その椽大の才筆をふるひて、芳名を、後昆萬世に傳ふることを、敢てせざる。

吾人は、はやく、既に、明治の女流文學者の、技能は、とほく、藤原氏極盛時代の名媛を壓するに足り、力量は、はるかに、徳川氏時代の才女に駕するにあまりあることを信ずるものなり。こひねがはくは、これまで、その小説に向け、新體詩に注ぎたる技能力量の半をわかち、他の方面にかたむけて、或は吝むことあること勿れ。

女子敎育一班（二十三）

三輪田眞佐子

女子の智育

古人曰ひけらく、仁者不憂智者不惑と。これを以て、おのれは、以上女子の徳育につきては、天然を師として人分を全うし、徒ら憂へさらしめんことをものしけり。以下

女子の智育につきても、亦天然に從ひて良知を養ひ、毫も惑はずして、人の人たる生活をなすに至らんことを以て目的とせざるべからず。こを換言すれば、女子の智育は、女子固有の才能を補助して、充分の開發を望むべきも、人爲を以て、固有ならざる才能を注入せんとするは非なりとこそ言ふべけれ。

されば、一般教育に於て、男子は男子として必要なる智育を施すべきものなれば、これに幷行して、女子は女子として亦必要なる智育を爲さゞるべからず。英人(シャーレッコ)の女子智育論に曰はく、人類たるものは、男なるも、女なるも、あるは王公ならんも賤民ならんも、各天賦の能力あり。これ等の能力を有用に導くこそ教育の任務なれど、げにさるものならん。惜かなわが國は、これまで女子天賦の能力を養ひて利用することをなさゞりしは。

思ふに、社會の單純なる時代には、國民の衣食住、なべて容易なるを以て、男子の力のみにて、世は運轉し得んも、社會の進歩に從ひて起る、女子の能力を利用することとの必要は、さながら、昔より人に知られざりし埋木なる石炭の、汽車汽船は更なり、諸の製造塲に、洋々と烟を吐くものから、忽ち世に文明の源とまでもてはやさるゝに至りしが如し。さるものなれば、往時すら慧眼の人は、女子教育の、男子教育と幷

行すべきことを望みたりけん。曹大家の女誡に、但教男而不教女不亦蔽於彼此之數乎とあり。況してわが國今日の如く、文運の進につけては、女子の敎育をして、男子の敎育に劣らしむべからず。若し男女敎育の程度に懸隔あらんか、眞の文明と言ふべからざるは更なり、到底文明の域に達することだに難からむ。あはれ、明月は清水を待ちてこそ愈美なれ。若し男子の敎育のみを重くし、女子敎育を顧ざる族は、濁水の月を見て滿足するものになん。

女子の敎育につきて、先づ定むべき疑問は、女子の爲すべき業にして、これまで男子の手を恃み、勢、女子は無爲無益に生涯を送ることを、今更女子の德育よりも、その智育に重きを置き、諸の業に堪能ならしめ、男子と生存競爭するも、敢て劣らざるやうするか否やにあり、されどわが國婦女現今の事情より考ふれど、善良なる國民を作る母、良人をして內顧の憂なからしむる妻、あるは餘力を以て、社會の業務にして最も婦女の力を要するもののみに從事するため、女子の智育を施すべきなり。孔夫子のたまふやう、智及之仁不能守之雖得之必失之と。れのれは、なは、女子の智育を以て、直接には身を世に處するためのものなれど、間接には女德の力を假りて、始めて好き結果を得るものなりと信ぜり。こを思ひかを考へんも、女子智育の目的を、かゝる區

域に止むべきものならむ。

尤も上に述べつる智育の目的は、普通なる女子教育に限るなり。元來女子の教育は、普通のみにて止むべきにあらず。果して男子教育と并行せんとならむ、是非高等教育を施さゞるべからず。おのれは、錯雜を避けんため、高等女子教育は、後章に於て別にものせんと思へど、茲には、普通女子教育上の智育のみを講せん。讀者その心してよ。蓋し、女子教育は、われ等婦女子の榮枯に、少からざる關係あるのみかは、邦家の盛衰に影響すること多ければ、沈思熟考して、あだし小徑にな陷りそ。

今や土さくる暑のころ、讀者は、將に幽邃なる綠陰清澄なる水邊にありて、平素の塵を洗ひ、凡情を淸むべければ、この時に、大におのれの肺肝を吐きて、讀者の叱正を乞まほしう思へども、さいつ頃より腦を疾み居りて、果さゞることぞ恨なれ、されど、梧の葉を打つ秋風につれて、病も怠らんをその時にこそ。

愼言につきて

鹽井ふく子

口は禍の門、小人常に輕々しく言を吐き、己を誤り、人をあやまり、また世をあやまる。愼むべきは口なり、殊に貞淑をむねとする女子に於てこそ其の然るを覺ゆるなれ。

天、物を云はず、行と事とを以て之を示すと云ひけむ、げに天津日の照す限りは、露を玉と欺く事もならねど、玉を瓦とも埋めず紫の如何に朱を奪ふとも、いつか誠の色のあらはるゝ事もあらむ。高屋は鬼に伺はれ、高枝は風に動かさる。人もやゝもすれど、寃罪讒言を被り、陸奥にありと云ふなる名取川、なき名とりて、ぬれ衣ほす由もなき事あるを免れず。されど、天定まりて人に勝つ、人はたゞ我が身を正しくして、俯仰して天地に耻づる事なきをこそ要するなれ。

昔時、泉州に豪富の商人ありけり。圍碁を大に好みて、堺に手習の師をなす猪飼何某と云ふものと、よく圍みて、樂みぬ。或る時、例の如く碁を圍み居りしに、その家の支配人、得意先きより來れる貸金の利金五十兩を紙に包みて、主人に渡しけるに、主人は、圍碁に夢中になり居りて、それにおくべしと僅に答へぬ。碁終りて人も歸りたる後、彼の支配人、先きの金の事を云ひ出でたるに、主人は聞し覺えはあれど、受け取りたる覺えはなしとて、處々さぐりたれども、あらざりければ、やがて、彼の猪飼に疑ひかゝり、直ちにその家に支配人をやりて、それとなく問はしめしに、猪飼は、暫時うちかたぶきて云ふやう、されどこそあれ、流浪の身のはかなさ、その日の煙りだにたて難く、多くの金に目くれて、人知れず持ちかへりぬ。夜あけなば、その金をそ

ろへてかへし申すべし。今暫し待ち給へと云ふに、支配人歸りて主人につげ、互に信じ難きを云ひて、そしりわひけり。後十日ばかりありて猪飼は金五十兩を持ち來りて、主人にわたし、我が家に歸り、一人の女子をつれて、何處ともなくゆきにけり。さて、富家にては、其の年のくれ煤拂しける折、座敷のなげしより、反古に包みたる金五十兩落ちしに、皆々いぶかしみて、しらべ見しに、過ぎしころ手習の師を疑ひたる金にてありければ、皆おどろきて、さきに疑ひし罪を謝せんと思へどわかねど、是非なくそのまゝに打ち過ぎぬとかや。これ有名なる義商天野屋利兵衛が寶物の疑ひをうけし話に、よく似たる事にて、猪飼は元より盗みしにはあらざれど、人の疑心の詞を以てとくべからざるを悟り、己が女子を島原につとめさせて、金をとゝのへ、己は生涯郡村と云ふ所へ耕したりと云ふ事は、後にぞ聞えぬる。

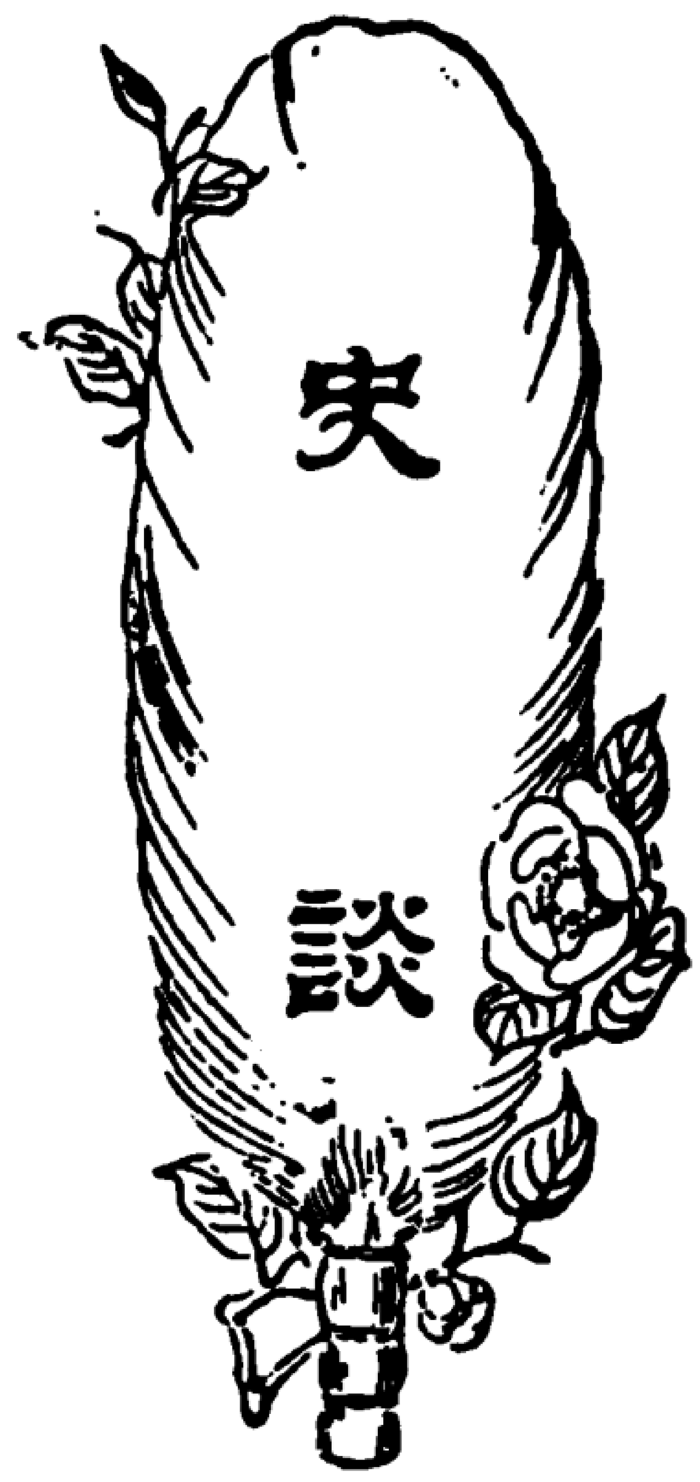
また、雪舟と云ふ僧徒は、生れつき繪を好みて、大に巧みなりけり。曾て、明國に遊びし折、明帝召して禮部院の壁に畫かしめしに、富士、三保、清見の三絶景をうつししに、名儒詹僖ために讃を作りて、相傳へぬ。その後、大内侯、畫を明國に購ひて、此の畫を得たり。大内侯よろこびて支那人の筆なりとて、人にはこりぬ。雪舟一見して、是は老衲の明にありしとき、作れる所なりと云ひしに、大内侯は欵問して名をうるも

のとして、大に怒りけれど、雪舟は敢て爭はず、倏然として去りて石州に適きぬ。後その書絹、ものゝためけがれしかど、その工に命じて洗はせしに、雪舟の名隱々として見はれぬ。大内侯初めて、その己を欺かざるを知り、慚悔して雪舟を召せども雪舟は已に死にたるあとなりきとぞ。嗚呼、知らざるは恐るべき事ならずや。されど孔子は人に知られざるをうれへず、たゞ人を知らざるを恐れよとのたまへり。また七度さがして、人を疑へと云ふ諺もありけり。實に愼むべく恐るべきは人の言、人の心、みだりにゆるがせになして、世の人を害せど、後、悔むともせんなかるべし。

世には曾參と云ふもの、二人ありしためしもあり、孔子は楊虎に似たりしと云へり。むかし應長の頃、伊勢の國より女の鬼になりたるをゐて上りたりと云ふ事ありて、其の頃二十日ばかり日毎に京白川の人、鬼見にとて出まどふ、昨日は西園寺に參りたりし、今日は院へ參るべし。只今はそこ〳〵になど云ひあへり。正しく見たりと云ふ人もなく、空言と云ふ人もなし。上下只鬼の事をのみいひやまず、その頃東山より安居院の邊へまかり侍りしに、四條より上ざまの人、皆北をさして走る。一條室町に鬼ありと罵りあへり。今出川の邊より見やれど、院の御さじきのあたり、更に通りうべうもあらず、たちこみたり。早く跡なき事にはあらざめりとて、人をやりて見するに、大方

逢へるものなし。くるゝまで、かく立ち騷ぎて、はては、爭ひ起りて淺ましき事どもありけり。其の頃れしなべて二三日人のわづらふ事侍りしとぞ、彼の鬼の空言は、此のしるしを示すなりけりと、云ふ人も侍りしなど、徒然草にも見えぬ。一犬虛を吠えて、萬犬實を傳ふとは、かゝる事なれど、誠はその實なければ、一人も見し人はあらずかし。されど、君子はその人を知らず、その行を見ずして、徒らに人をそしり、おとしいれなどせず。一犬の虛を吠ゆるに和するものは、げに匹夫の行なりけり。

扶蘇の寃は云はず、菅公の寃も云はず、浮雲一時日光を掩ふも、日の光つひにあらはれざらでやはあるべき。かへすぐゝも愼むべきは、さがしら言なりかし。世の學ある男子はもとより輕く人言を信じて、人を惡しざまにいふ人は少なかるべけれど、婦言事を誤りしこと、古來その例いと多かり、さらでだに、口善惡なしと云はれし女子の身、みだりに讒謗の言は逞しうすまじきものなり。



洛陽の貞女

鹽井ふく子

己を正しうして、よく人を正しうすと云ひけむ、風雨、高山を纏ふも、日光はとこしへにその巓を照すめり。霜雪覓に千年の松を埋めつくすべくもあらず。人はたゞ巳を省みだにすれど、遂にはその德おのづからにあらはれて、知らず〳〵人をまで化するものなりかし。むかし京都のある富める家にて、よく此の言に叶ひたる妻女ありけり、その名は今詳にするよしなけれど、その德行はなほ朽ちずして、世に傳はり居りぬ。その夫、年久しく關東の方へ行き居りしに、妻女は、あけくれ東の空をのぞみて、はるかに夫の身の上の安全を祈り、身を清くし、行を正しくし、たゞその歸らん折りを待ちに待ちて、心細くも空閨をもり明かし、守りくらしけるに、夫はその心をも汲まず、花ぞめの人心、いつか關東の美き女に迷ひ、歸鞭の日、諸共につれ來り、路より使を

れこして、妻女に云ふやう、我關東より一人のよき妾を求め得て來りぬ、汝もし快からずむ、速にその家を去るべしと。嗚呼、そも、世の常の女子、たゞ一人を思ひのふちに、あこがれ、あかしつる曉に、かゝるつれなき事を聞きなむ、そも何とや思はん、恨みんか、怒らんか、げに恨みはて、泣きつくして、ほとんど狂ひもやせん。されど此の妻女は、誠に人に妻たる德を備へたる婦人にして、うらみ憤れる色はつゆもなく、容姿も心もいとしとやかに、靜かに、其の人に向ひてつゝがなく歸り來りしよろこびを、陰ながらに云ひ、さて云ふやう、古へより夫妻の道は、德音違はず、則ち以て君と死を同うすと云へり。然るに、云ひ甲斐なく今我色おとろへ、愛弛みて、夫の君の心を得ざるは、是我が德のかけしにて、誰をか恨みん、身の不德をうらむるより外にせんすべもなきのみ。幸に庭園に草をも生せしめず、軒も床もそのまゝに、たゞ君が宿として守りおき侍りぬ。早う歸らせ給ひて、よき人をも住ませ給はゞ、己も中なかに後ろ安うなんと言傳てやり、それより閨幃を掃ひきよめ、庭をも家をも一人にすずしうかざりて、盛饌をさへ設け、賓客をまつ如くにして、己は他へ退きけるとは、さても感ずべき女子ならずや。妾も流石に此の事をうち聞きて、大に身を愧ぢ、男に語りて云ふやう、先婦は洵に世にたえたる賢き女にてましましぬ。如何で〱妾の及ぶ

べき處かは。彼のやうなる貞淑の婦女を出し給ひて、不肖の妾を納れ玉はゞ、天に對しても、人に對しても、誠に恐ろしき事にて侍る。妾は御家にまかりありて、たゞ箕箒のつとめをとり侍らん。願くば、妾を別室に居らしめ給ひて、先の婦君を呼びかへして、元のやうになし玉へ、もし妾の願ひをきかせ給はで、婦君を正室に入れさせ給はずば、妾に於ても、夫君に奉する道もあらねば、速に御いとまを乞ひて歸らんとて、泣々云ひしに、夫もさとる處やありけん、先きなる婦人を呼び返して、もとの如くにせしに、二人とも泣きてよろこび、互に忌妬する事なく、たゞ姉妹の如くに、よくむつびて、夫につかへければ、家道正しく、秋の露、冬の風、さのみ身にもしまず、いつも春の日の互の心ものどかに、和氣家にみち／＼て、いとにぎはしく、いや榮え、いやしげりたりきと云ふ。人をとがめずして、己を省る德は、これまたかくの如くに大なるものなり。別て女子は、よしやこむしは恨む事を人のなすとも、必ずとがめず怒らす、唯々己を省みて、いつか默々の内にその德はあらはるゝものぞかし。

奴の小萬

山崎美成

奴の小萬は名を雪といひて、浪華島の内なる藥舖本津屋五郎兵衛が女なり。幼より心

たて伶俐、性質俠氣ありて、男子に勝れる操あり。十六歳の時、侍女家僕を從へ、天王寺にまうづる道のほど、下寺町より口繩坂を登るに、向より、世にすりと呼べる、ひる盜人二人來かゝり、やがて雪女が櫛笄を奪ひ去らんとせしを、雪女すかさず、彼が手を捕ると見えしが、さしもにいかめしき男どもを左右へ投出し、聊も驚騒ぐけしきもなく行過ぬ。是よりこの雪女を世人よびて奴と異名せり（奴さはそのかみ俠者の稱なり）けれど、その噂浪華はさらなり近郷までも聞えしかど、はやく延享五年正月二日より、豐竹座の操芝居にて、客競出入湊と云ふ狂言に、奴小萬と云ふ俠女子を取組しは、實は雪女を摸したるなりと。かゝれど雪女が噂ます〳〵高く、後には雪女が名をもいはで、奴の小萬と呼べりとかや。雪女もこれを自よきことゝおもひて、俠氣日々に募りしが、文事にも志ありて、梁田悅巖の門に入り、又和歌俳諧にもうとからず。雪女つね〴〵いへるは、我家系は三好修理大夫長慶が裔なりとて、遁世の後は三好正慶と自稱し、難波村に住たり。家資を悉、月光院に納めて、身を雲水に任せ、世は捨たりとも猶俠氣やありけん。或日瑞龍禪寺に大法會ありし時、急雨にて參詣の群集雨具の備なくて、いと難義の折柄、正慶尼見るに忍ずとて、長町へ人を馳せ、傘百本を買もとめ、半面の識だになき老君へ借しあたへぬとぞ。文化元年の春、七十六歳にて身まかりぬ。

家政

たちぬひ

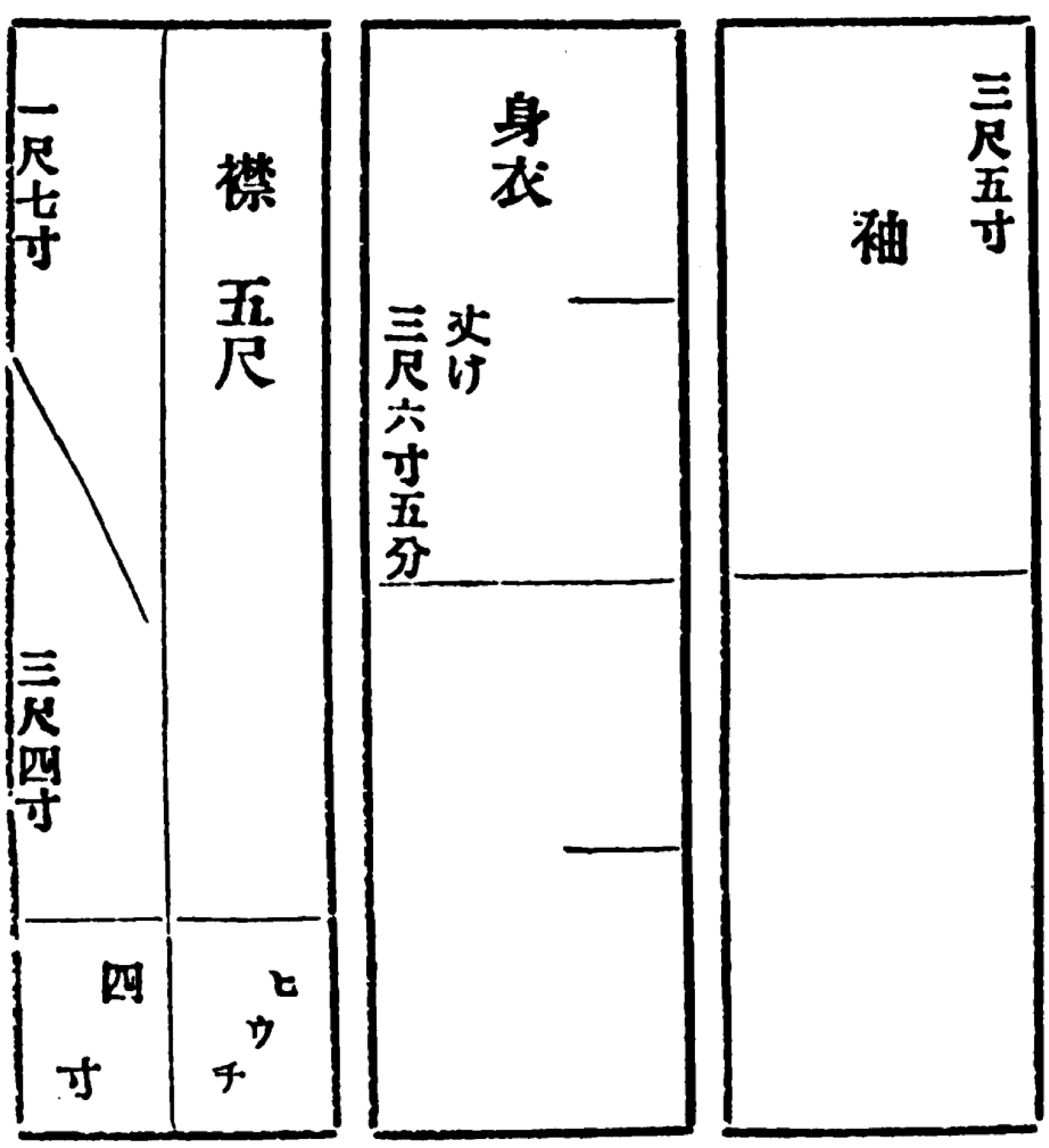
西山たい子

(四十四) 夜着の裁ち方

夜着も濶袖も大方は同じにて、たゞひうちと云ふもの丶多く入るのみなり。

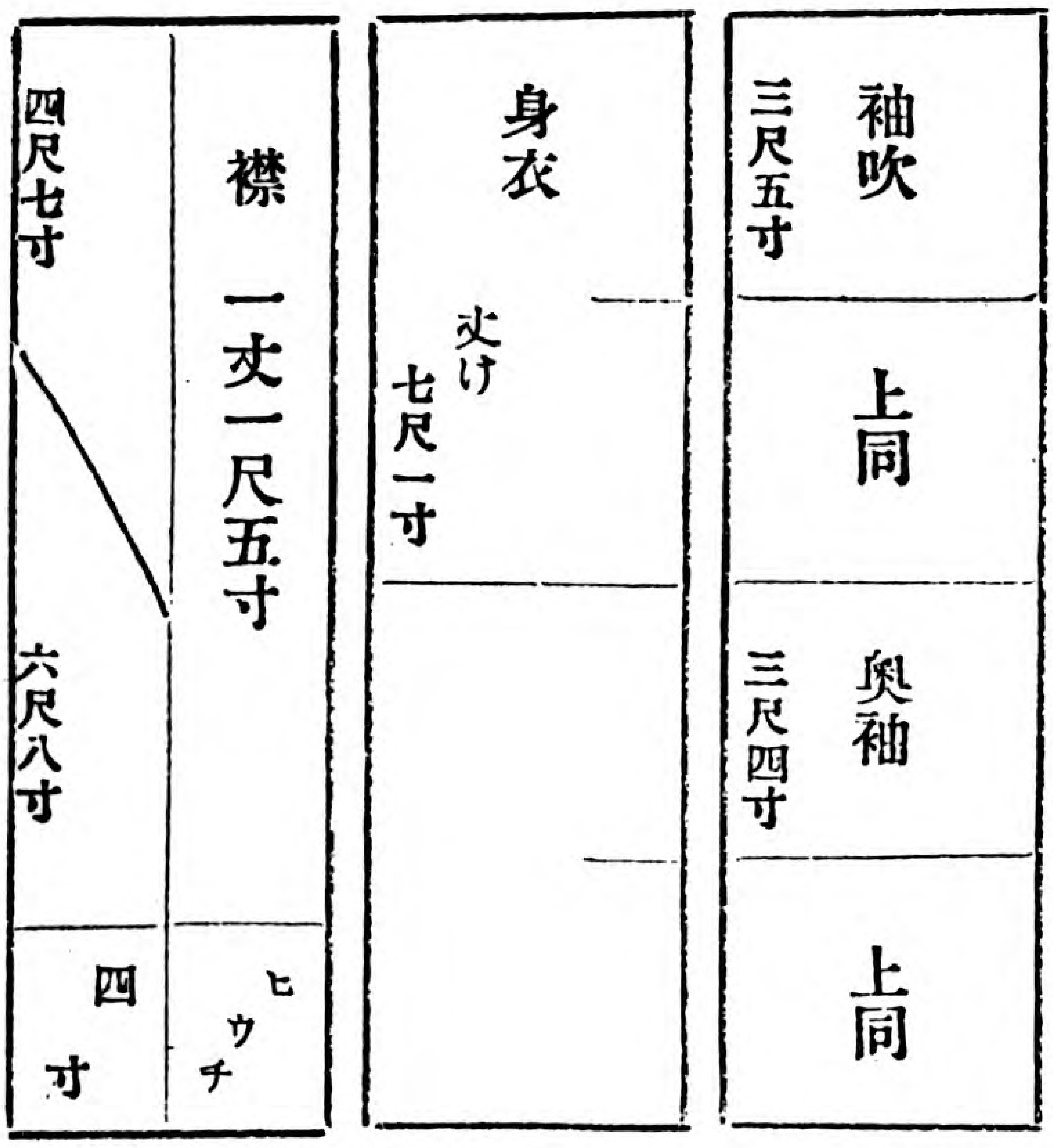
まづ袖を裁ち、身衣をとり殘りの切より袖下へ入れるひうちと云ふ襠の如き四角なる切をとりて、殘りを襟と衽とにするなり。

裏もまた口袖と奥袖とをまづ裁ちてとり、身衣をとり殘りの切よりひうちをとりてそれより襟と衽とをとるべし、寸尺等は圖にあれど見合すべし。



表は一反にて裁つなり

此の外　襟巾四寸　襟形四寸　衽巾五寸五分



裏は二反にてたつなり

巾は表に同じ

（四十五）　その縫ひ方

濶袖の如く表袖へ袖吹の切を縫ひ付、ひう



ちの切を入て、袖下をぬひ、裏の奥袖にも、ひうちの切を入れて、袖下をぬひ置き、（但し裏袖は表袖より八分ばかりつめるべし）それより身衣の背と兩脇とを縫ひ、衽をつけ置き、またそれより裏の身衣の背の眞中を三尺ばかり明けおきて、上下をぬひ、兩脇をぬひ衽をつけ、裙を合せ、四袖をつけ、褄下を定めてぬひ、襟のたけを見て、襟先きをはぎつけ、それを身衣に表より裏までぬひまわしてつけ、裏の背よりうらがへして、また表裏の襟をぬひ合すべし。皆ぬひ終らば濶袖の如くに裏を表に包むやうにしてたゝみ、表の背を上に出して綿をのせ、形をつくり、前を下より綿の上へのせて、すみ〳〵に引糸をつけ、また回りをば綿にとぢつけ、袖綿をさし入れ、裏の背のわけある處よりひきかへして、よく引き合せ、裏の背を絎け、袖をくけ、よきほどにとぢつくるべし、綿はいつも切よりは一寸ばかり四方とも長くなしおくべし。

造花

伏見藤三郎

我が國にては、造花の術未だ盛に行はれず。從てその術の精妙を得たりと云ふ人も聞かず。されど歐洲諸國の婦人社會には盛に行はるゝなり。これ元より美術の一科なれど、我が國にしても、女子の手藝としては最も高尚なるものなるべし。其の術熟達するに至りては精巧の花卉、美妙の花簪等をも自在に造り出す事を得て、いともおもしろき業なり。ことに利益も鮮少からざるべし。

されども我が國にては、未だ造花の事を記せる書無

くして山村辟地などにありては、師にさへともしけれど、此の術の廣く行はれざるも故なきにあらず。まだ見ぬ人のためには只筆の先のみを以て、解かんとするは、甚だ困難なる事ながら、さりとてやむべくもあらねど、今余は是迄女子職業學校にて實地に敎授し來りたる順序により、殊に詳細に一々繪畫をも挿みて、丁寧を旨とし、務めて分り易き様に記載せんとす。孃たち其の心してよ。

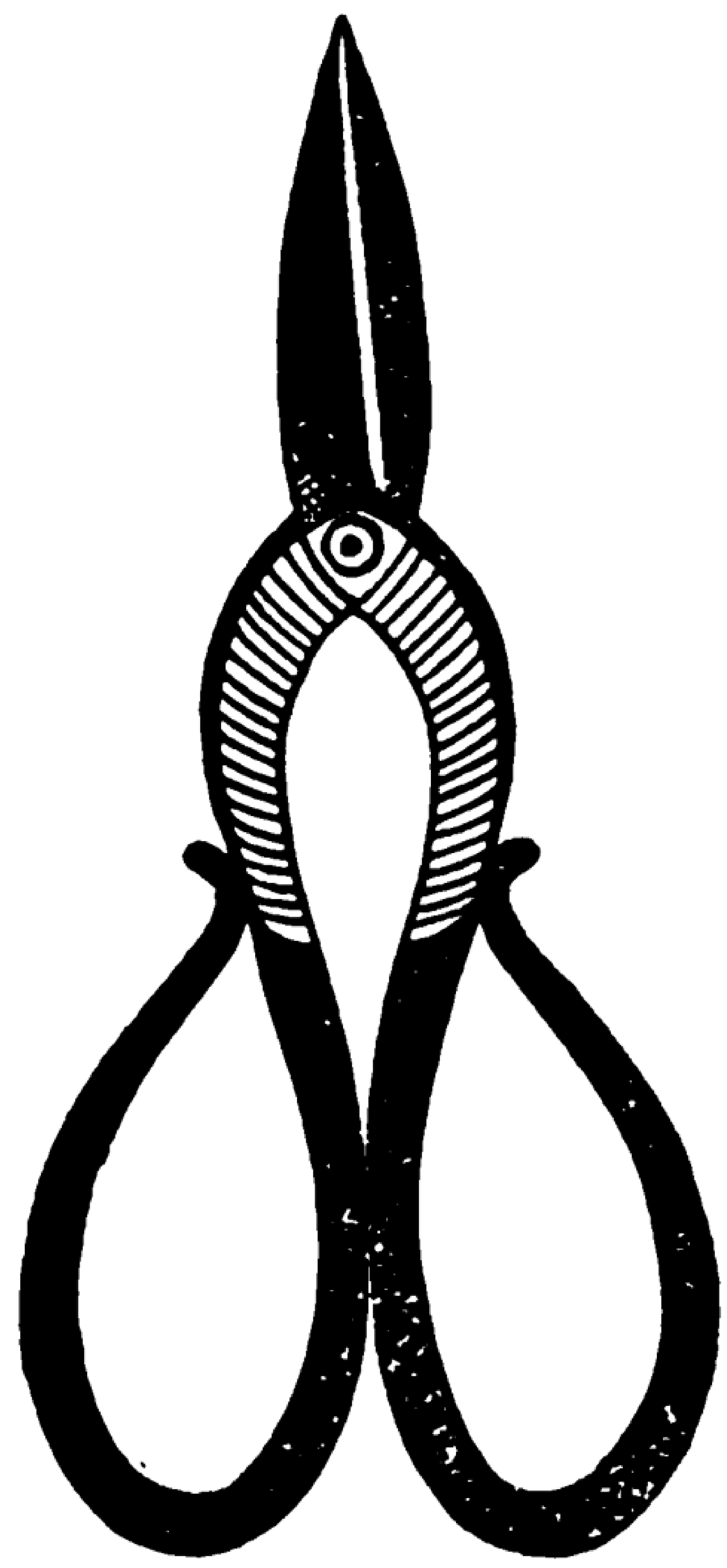
凡て何業にても、初めはいとむつかしき様なれも少しく心を止めて學びゞ後には追々容易になりぬべし。その中に造花の術の如きも亦然り、はじめのほど難きやうに覺ゆるをこらへなど、日を經るに從ひて自ら適宜なるものも造り得られて、最も愉快なるに至るべし。

最初は成るべく實地に習得し易からしめんために、先づ簡單なる造花につきて、圖によりて是れを說明しながら、器具の使用法、色着け法などをも自ら其の中に了解せしめんことを務めたれど、初めの內は殊に意を止めて熟讀せられんことを要す。しからざれど後にいたりて解し難き節出來るべし。さてこの造花術を行はんとする前に、まづ知らざるべからざる事なり。ろは用器具の種類、及繪具、幷に造花に用ゆる品物なり。此等のものは、造花術を習はんとする前に、まづ備へ置かざるべからず。今こゝに順次に圖によりて之れを示さんとす。

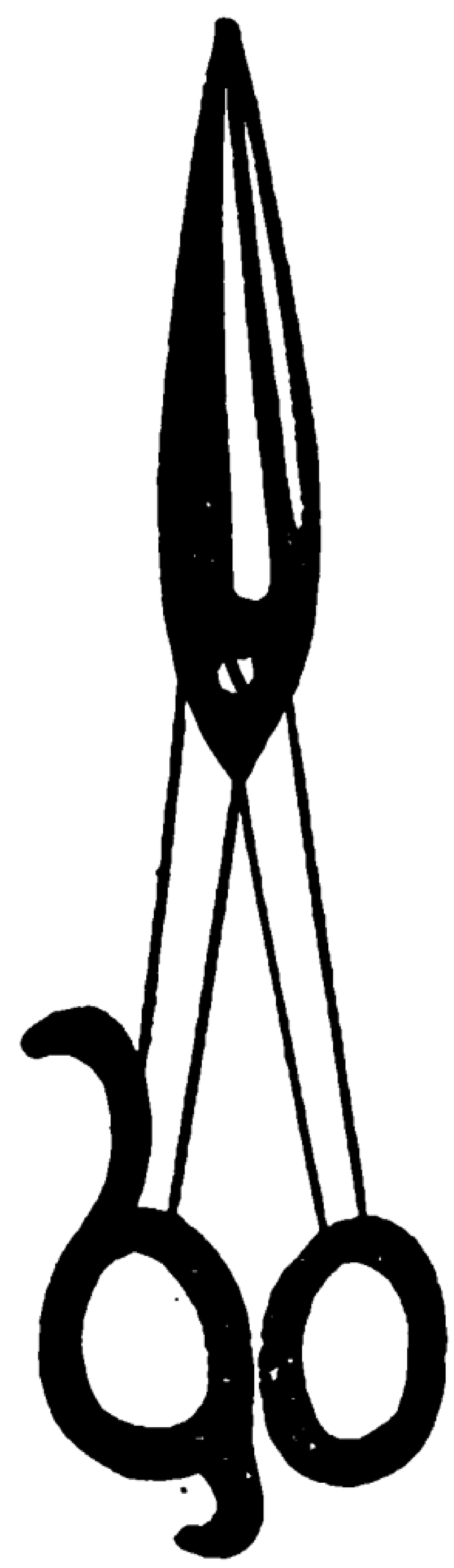
用器具の種類

用器具の種類は其の數甚だ多しと雖も、普通造花の用器具は、鋏、ピンセット、庖丁、鏝の數種にて足れり。第一圖に示せる鋏は造花に用ゐる花瓣、及枝葉を剪み、針金を斷つに最も必要なり。

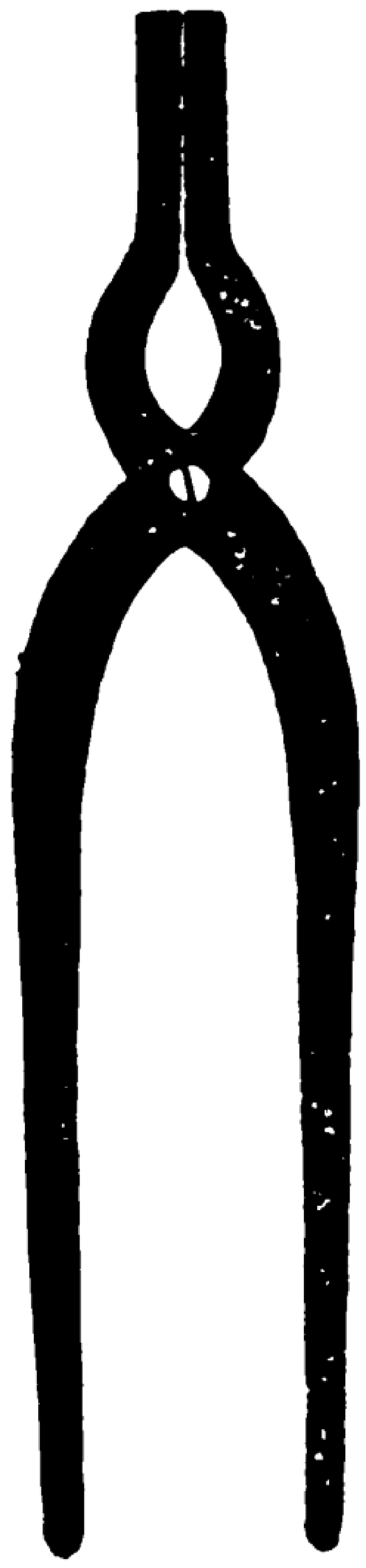
第一圖　鋏　甲



仝　乙



仝　丙



第二圖のピンセットは凡べて花瓣或は緻密なるものを挾むに用ゆ。

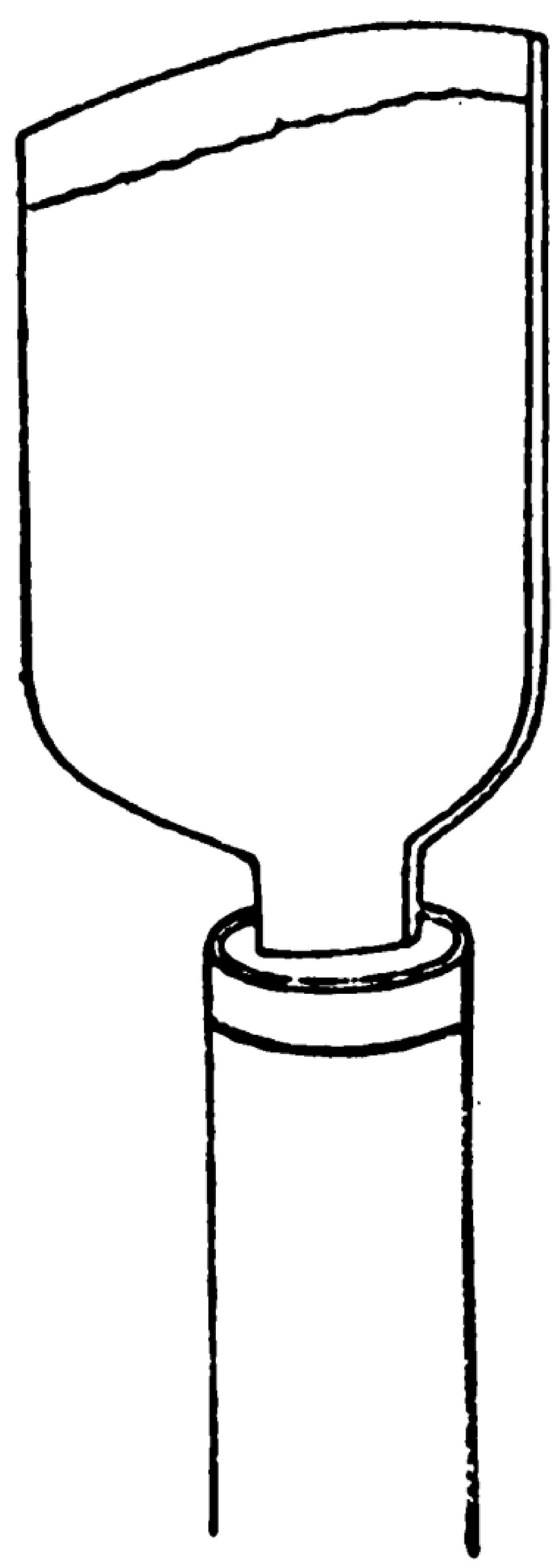
第二圖　ピンセット

正面　側面



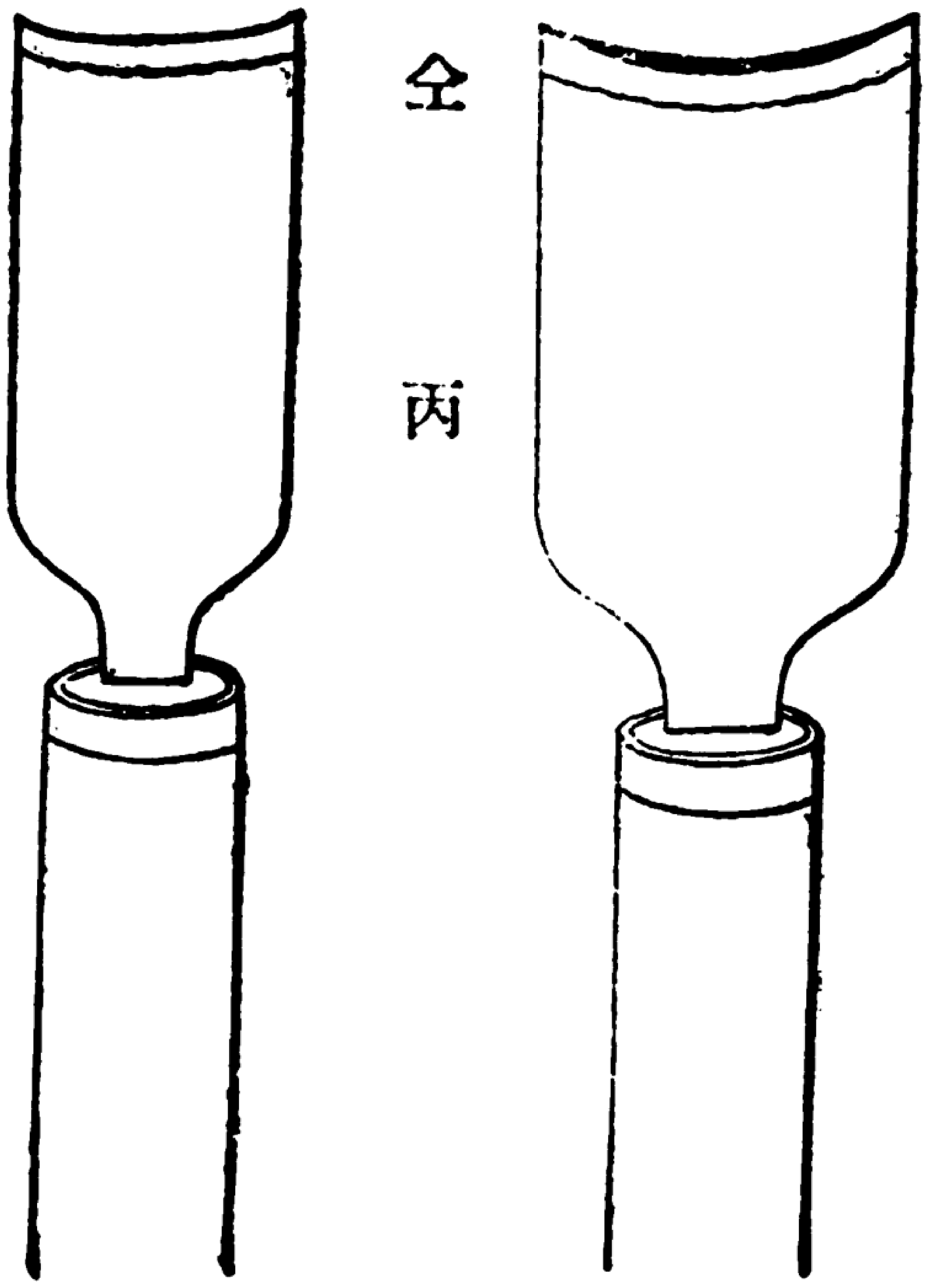
第三圖の庖丁はものを斷ち切るに用ゆるものにして、乙、丙は歐米造花術上に用ゆる打貫等に代用す。されど此れ等の器具は、初めの間は、第一圖の鋏にても代用し得べし。

第三圖　庖丁　甲



仝　乙

仝　丙



第四圖は筋鏝とて、花瓣及葉の筋をつくるに用ゆ。

第四圖　筋鏝



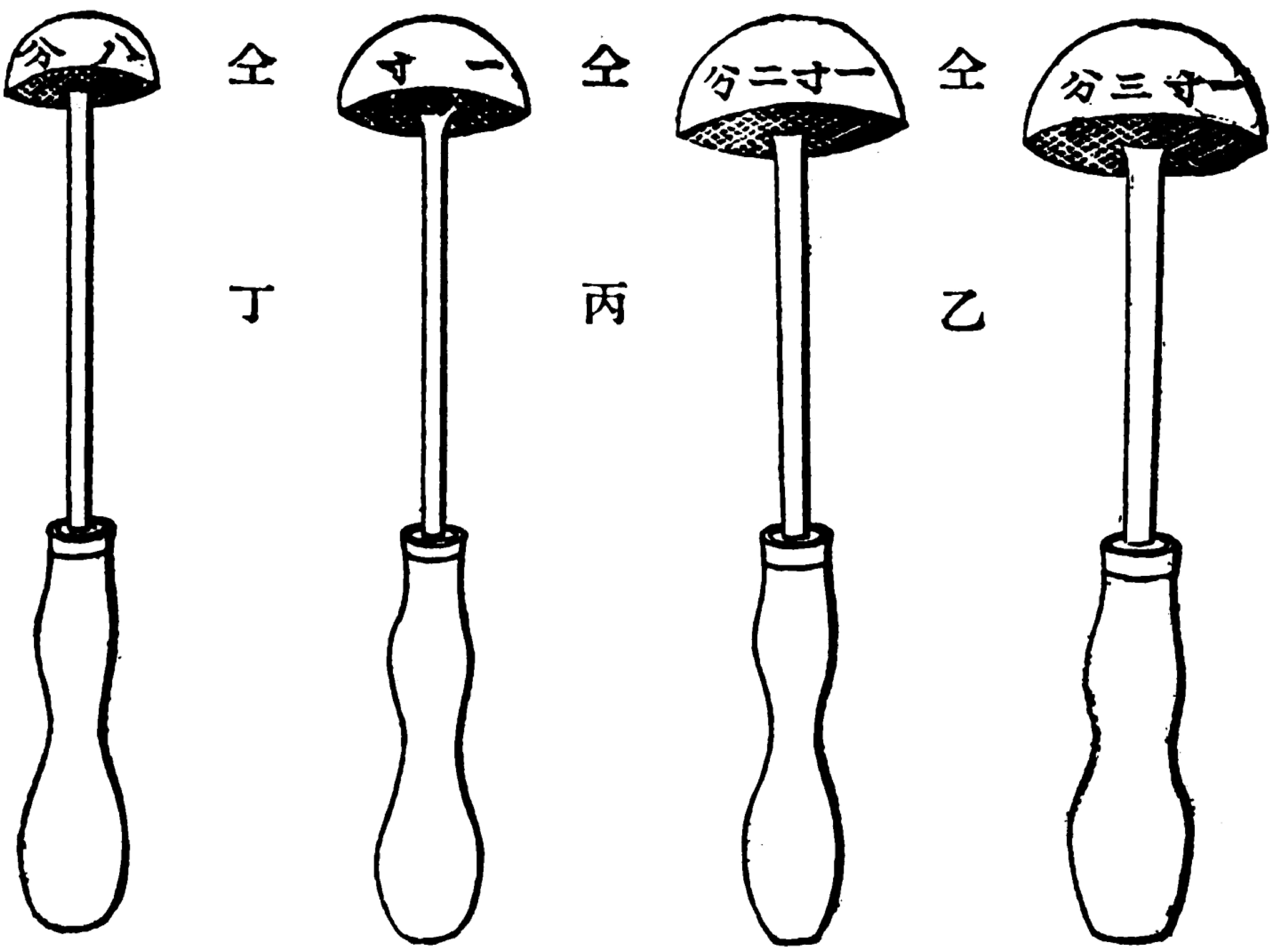
第五圖以下第十圖まで、みな鏝の種類なり。

第五圖　薔薇鏝　甲

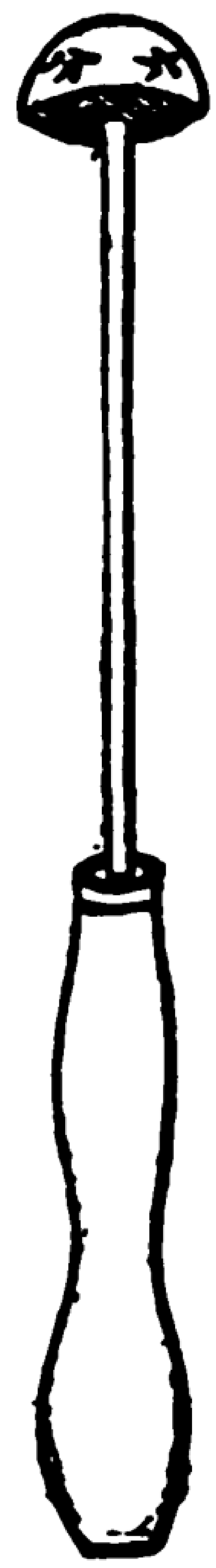
仝　乙

仝　丙

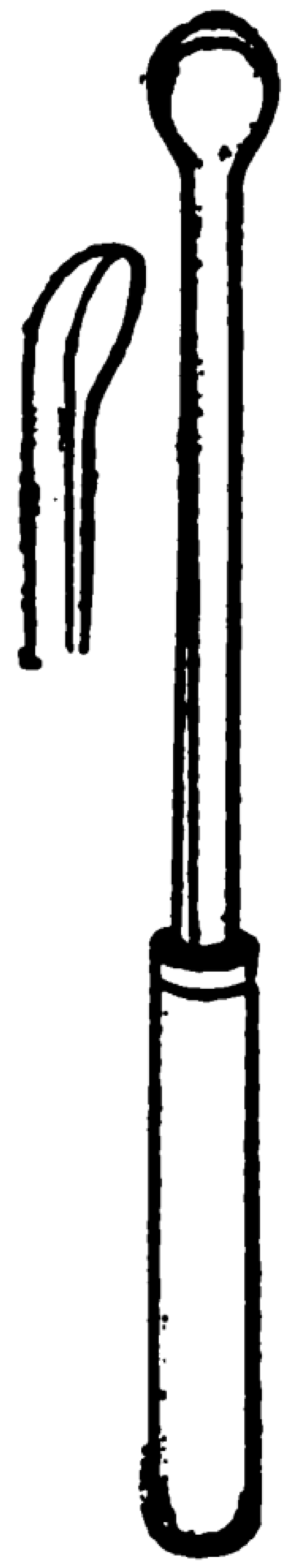
仝　丁



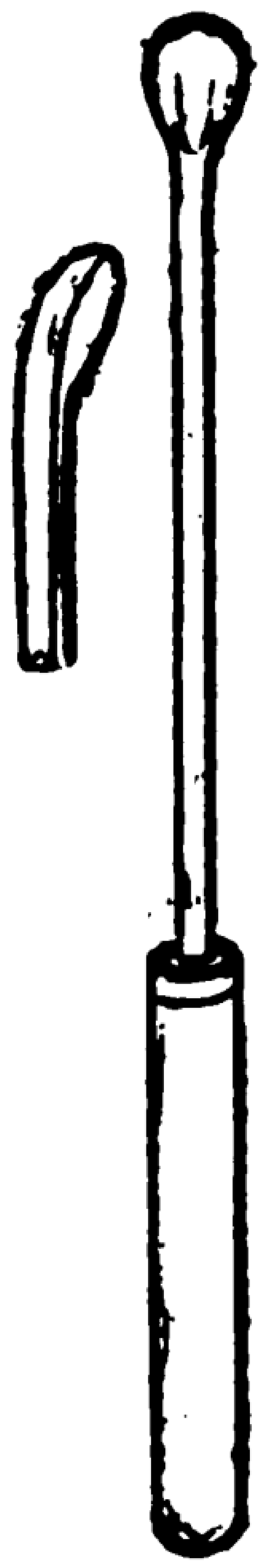
仝　戌



第六圖　擠饅大　甲



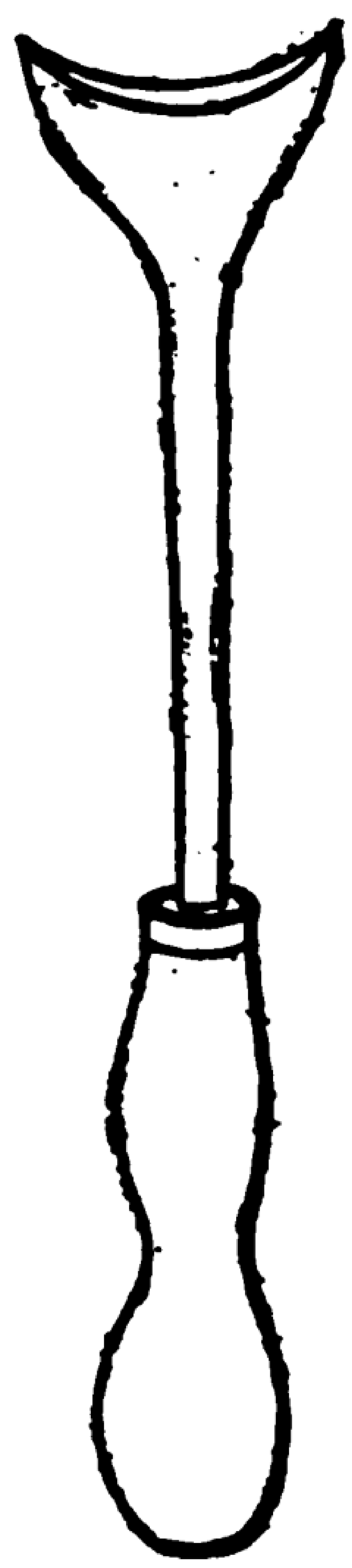
仝　乙　中



仝　丙　小



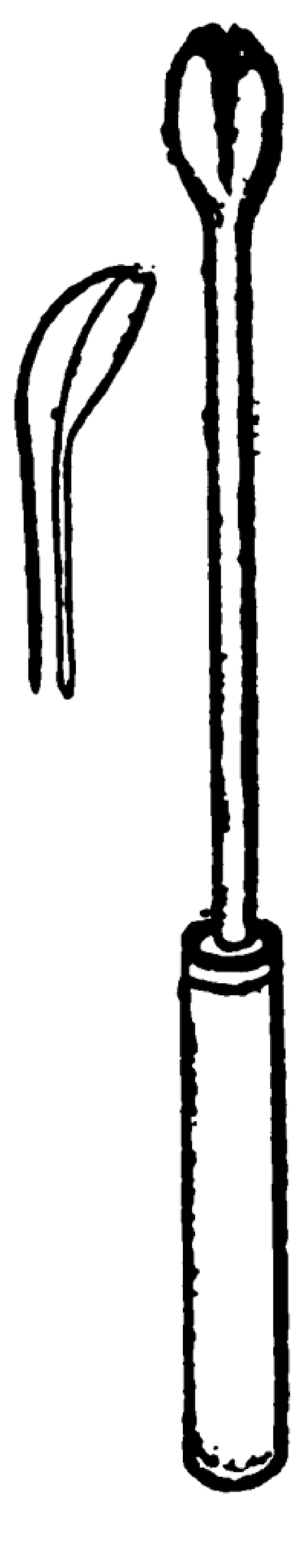
第七圖　きりしま饅



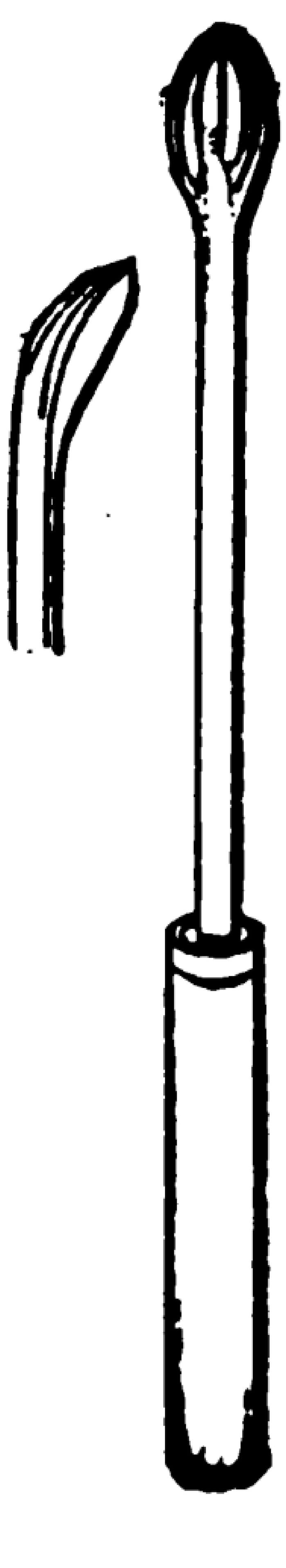
第八圖　紫陽花饅

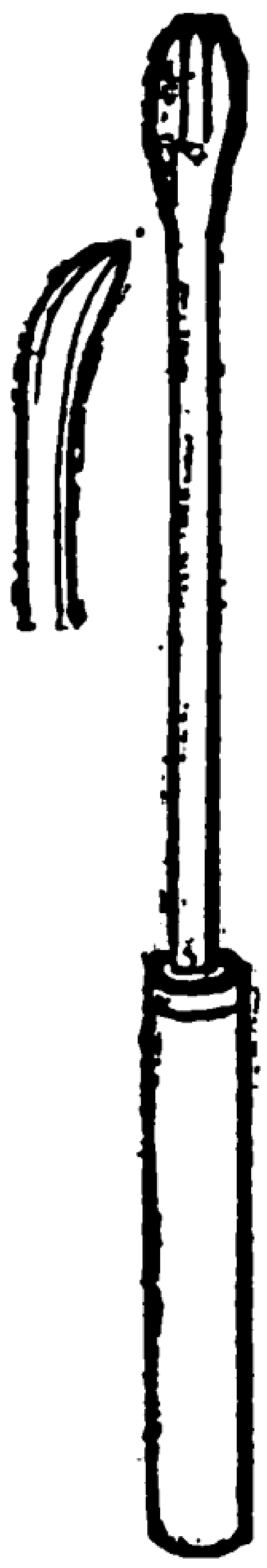


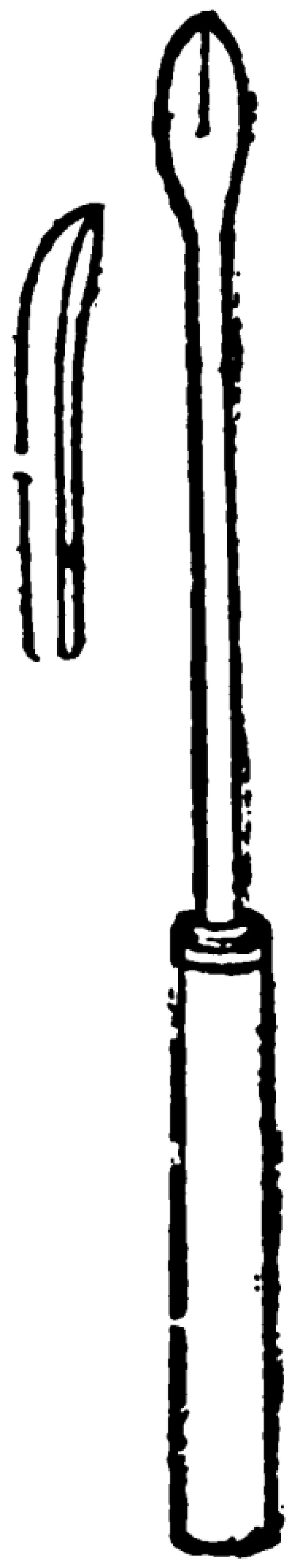
第九圖　櫻饅



第十圖　甲　菊饅大



正面
側面

全　乙全中

正面
側面

全　丙全全

正面
側面

全　丁全小

我が國にて使ひ來れる器具は大概以上の各種に過ぎず。さて次に其の使用法を説明するは必要なれども、繁雑に渉るを以て、これは造花の際に於いて一々記載することあるべし。次號にては歐米諸國に使用する、ねしでて、うちぬき等の器具を示して參考に供へんとす。

だいどころ

犢の肉焼方

犢の肉を焼かんには、胸腿等の肉を佳しとす。右の肉量目二斤に、大匙二杯の麵包粉、刻みたる洋芹、七匁の凝脂（牛豚の脂肪を製したるもの）鶏卵一個好程の食鹽、胡椒とを混和し、焼鍋に牛酪を落し、其中に投れて凡そ三四十分間程焦附かさる様に焼くべし。若し肉より出る脂肪少き時は、牛酪を塗りて宜し。但し之を皿に盛りたる時は「レモンの薄片三四を添へて、出すべし。

又肉を薄くきりて、前に擧たるパン粉、其他の加味物を混合せたるを肉にて包み、其上を糸をもてくゝり、兩端に牛酪を引きたる紙を貼つけて火にかけ、時々牛酪を、塗りつゝ、二三十分間武火にて焼べし

豚肉の焼方

焼料理に、用ふるには、腰部を佳しとす、其肉三斤を一切となし、其外皮に四五分程づゝ、切目を付け、其處に能程に「オリーブ」をぬりて、泡のたゝぬ樣防ぐべし。若其肉脂肪少き時は、時々、牛酪を塗りて焼べし。焼時間は、牛肉よりも少し長く火にかけ置き、深き皿に盛り林檎醬汁をかけて用ふへし。

豚肉團子焼

脂肪少なき、豚の肉を細かに刻み、之を擂鉢に投れて能く擂り、之に細かく刻みたる洋芹と、胡椒、食鹽等を能程に加へて搔き交せ、團子に圓め、饂飩粉をふりかけて串に刺し、十五分か二十分間程文火にて焼べし。又鹽豚を細かに刻み交ぜるも佳し。

羊肉の焼方

羊肉の股、腰の肉を、最もよしとす。其焼方は牛肉と變ることとなけれども、羊肉は能く焼けたるを賞美ものなれば、牛肉よりも長く焼べし。其肉腰部なる時は脂肪分を、取去るべし。脂肪分を附けて焼たる肉は、皿に盛りてきりたる時、脂肪浮出でゝ見苦しきものなり、注意すべし。

胡瓜の蒸方

質良き胡瓜三本の皮を剝ぎ、二ッに割りて「シン」を去り、斜切になし。玉葱一個を細かに刻み、胡瓜と共に「シチー」鍋に投れ、肉の煎汁二合を注して火にかけ、其沸騰ちたる時、鷄卵の蛋黃一ッと、大匙一杯の牛酪を落し、又刻みたる肉豆蔻と、番椒少しを

加へてよく攪き交せ、凡十分間蒸煮にして用ふべし。
但し此等の蔬菜類は、多く肉類の脇附に用ふるものなり。

蕪菁の蒸方

大蕪菁、二本の皮を剝ぎ、之れを骰子目に切り置き、「シチー」鍋の中に大匙一杯の牛酪を溶かし、其中に「カブラ」を投れ、鍋をふりながら火の上に五六分間かけたる後、二合の肉汁を注し、胡椒、小麦粉、食鹽等を能程に混和せ、凡二十分間、焦げざる様徐かに蒸煮にすべし。

學園

日本文典（十六）

鹽井正男

三、未來、現在の動作にもあらず、過ぎ去りにたる動作にもあらず、これより後に爲さむとする動作、或は將に來らむとする動作をあらはすに用ふる詞なり。かゝる動作をあらはさむには、その動詞の將然の格の下に、むといふ助動詞、或はましといふ助動詞を添へて、これをあらはすなり。例へば、萬葉集なる大友の黒主の歌に

いざ子どもやまとへ早く白菅の
眞野のはり原手折りて行かむ

とある如し。行かむは、もと「行か、行き、行く、行け」といふやうに四段に活用する動詞の將然の格なる「行か」の下に「む」といふ助動詞を添へたるなり。而して、此の「行かむ」意味は「既に行きし」をいふにあらず。又「現に行く」にもあらず。「これより行かう」といふ意なり。いまだ行かざるなり、未來の動作なり。これにて推しはかられよ。なほ一例をあぐれど、仝集なる柿本の人麿の歌に。

みれどあかぬよし野の川の常なめの
たゆることなく又かへりみむ

とある見むも、同じく未來の動作なり。而して見といふ上一段に活用する動詞の將然の格なるみの下にむといふ助動詞を添へたるなり。これを過去のことにせんとすれば、見きとか、見たりとか、或は、見けり、見ぬ、見つとかいふべきなり。現在のことにせんには、見るといふべきなり。それを未來のことをいふなれば、かく見るの將然の格のみの下にむを添へて、みむとして、未來のことをあらはしたるなり。「まし」も、その用法は、むと仝じやうなれど、ここに略く。なほむとましとの助動詞の活用などにつきては、詳しく助動詞の條に申さむ。

形容詞

形容詞は、或は形狀言ともいふべく、すべて、名詞代名詞の前後に添へて、その名詞代名詞の有樣をいひあらはす詞なり。例へば「山高し」「海深し」「雲はやし」「風さむし」「月清し」「花わかし」「高き山」「長き河」「遠き山」「廣き野」「やさしき風」「白き雪」「よき人」「彼れ美し」「これきたなし」などいふ時の「高し」「深し」「廣し」「はやし」「さむし」「清し」などの類皆これなり。なほ數多あり。

此の形容詞も、動詞と全じやうに、その語尾の變化する詞、やがて、活用する詞にして。且ッ。その語尾の變化するに從ひて、自ら定まりたる格を有する事も、また能く動詞に似たる所あり。さはいへ、全く同じやうにはあらず。

その語尾の變化するさま、即ち、活用するさまには、二種あり。これによりて、形容詞は二種に分つべし。やがて、世の文法書にいふ所の單複の別なり。

單辭といふ方は、例へば「廣し」といふ詞の如し。この語は。

廣し　廣き　廣く　廣けれ

といふやうに「し、き、く、けれ」と變ず。而して、その變化するに從ひて、自ら定まりたる格を有することは、左の圖の如し。

終止格	連体格	連用格	將然格	已然格	假体格
廣し	廣き	廣く	廣く	廣けれ	ひろ

終止、連用、連体、將然、已然といふ格の意味は、動詞の時にいへると全樣なれど、こゝに再びいはず。假体の格といふは、体言の如くなる時の形なり。これ等の格につきて、一例をあぐれど、「海廣し」といふ時の「廣し」は、終止の格にして、「廣き海」といふ時の「廣き」は、連体の格なり。「海廣く見わたさる」といふ時の「廣く」は連用の格にて「海廣くど波高からむ」といふ時の「廣く」は、將然の格なり。又、「海廣けれど波高し」といふ時の「廣けれ」は已然の格にて、「ひろの海や」といふ時の「ひろ」は假体の格なり。斯の如く、終止する格、体言に續く時、動詞助詞形容詞に續く時、將に然らむとする意いまだ來らざる意をあらはす時、已に然るをいふ格など、自ら定まりたる法あり。

此の類に屬する形容詞の一二をあぐれど、

善し、淸し、高し、深し、暑し、寒し、
淺し、低し、長し、短し、白し、黑し、
赤し、遠し、近し、輕し、重し、固し、
細し、辛し、早し、遲し、多し、少し、
靑し、茂し、薄し、濃し、强し、弱し、

などいふ類にて、なほいと多かり。

複辭といふ方は、例へば「惡し」といふ詞の如し。これは、

惡し、あしき、あしく、あしけれ、

といふやうに「し、しき、しく、しけれ」語尾を變じて、而して、その變ずるに從ひて、有する格は、左圖の如し。

終止	連體	連用	將然	已然
あし	あしき	あしく	あしく	あしけれ

假体

あし

この類に屬せる形容詞の一二をあぐれば、

さびし、うつくし、かぐはし、涼し、
樂し、　苦し、　かなし、　うれし、
やさし、　をそろし、　久し、　空し、
いやし、をなじ、　はづかし、　くちをし、
親し、　くやし、

などいふ類なり。

形容詞の活用するさまと、動詞の活用すとさまと語る事は、動詞にては、その語尾の變ずるや、同行の音なり。例へば「行か、行き、行く、行け」の如く「か、き、く、け」と同加行の音に變ず。されど形容詞にては左行と加行と相混じて變ず「し、き、く、けれ」と變じ「し、しき、しく、しけれ」と變ず、前例を見よ。

形容詞は、語根のまゝにて、名詞の如く用ふることは、前の表に出したる如し。なほ一二例をあぐれば、

「長の旅」「面白の春雨や」などいふ時の長(なが)、面白(おもしろ)にて知るべし。

形容詞は、また語根に「さ」「げ」などいふ詞を添へて、名詞の如く用ふることあり。即ち

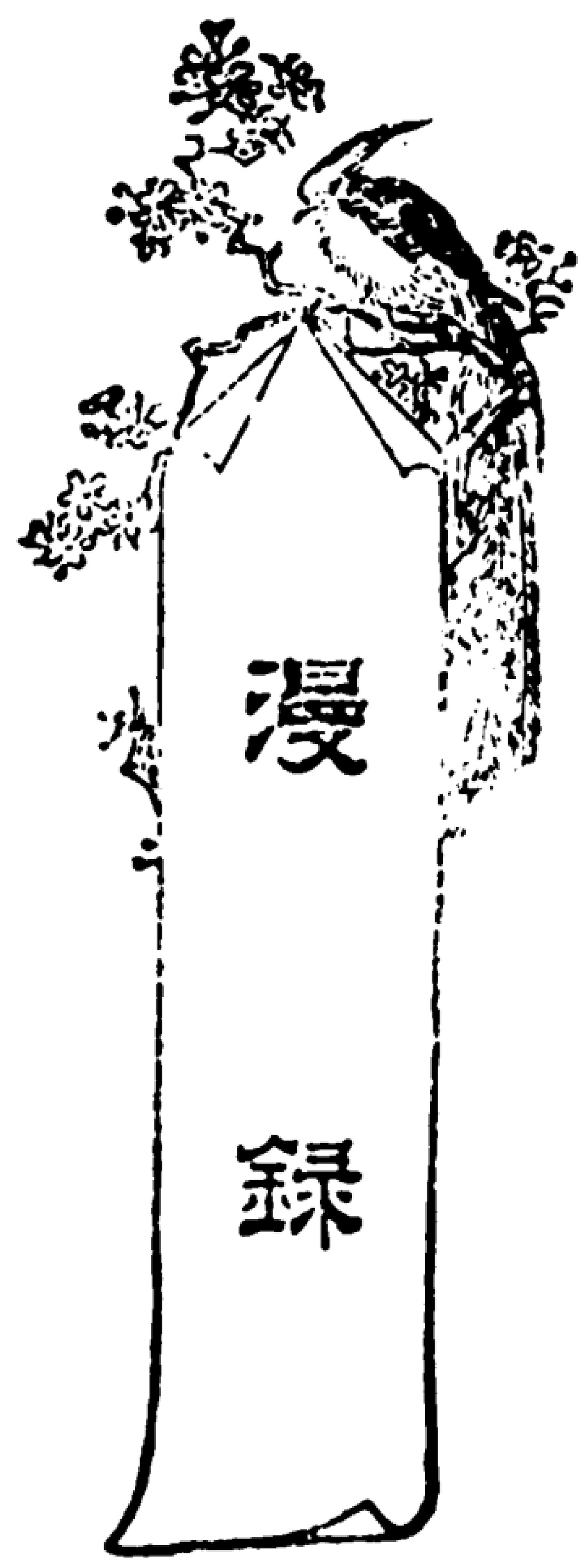
廣さ、　面白さ、　長さ、　高さ、　うれしさ、

涼しさ、　廣げ、　面白げ、　長げ、　うれしげ、

たのしげ、

などいふにて知るべし。

また、「み」といふ詞を添へて名詞の如くなる時あり。例へば「深みにはまる」などいふ時の「深み」なり。



古梅園大墨の辭

故人　源信遍

[redacted]

源信遍は戊島錦江なり。芙蓉道人とも寂然居士ともいへり。儒學を以て徳川幕府に仕へて其の名高し。和歌の道は更なり、佛の道にも深くわけ入れりきといふ。今こゝにかゝげたる一編はおもしろきふし多かれど、世の人いまだ知れるか少なければとて、さる文稿よりぬき出でつとて、このごろ落合東郭ぬしよりおこされたれば、かくなん。

（編者識）

縄を結び竹に彫りて、文字を通はせしことは、あがりての世の事にして、よろづわいだめなき昔になむ。人の心花に移り、世の様みやびを事とせしより、夏野ゆく小鹿の筆をはじめ、硯の池に墨かきならす事となりにけるより、言葉の林世に茂り、鳥の跡今も絶えせず。しかあれど神垣の内外の國の教をはじめ、支那の聖の道鹿の園鷲の山の御法に及ぶまで、松の葉の散失せず、呉竹の世々に傳へて、朽せぬためし、またなき寶なるべし。もろこしにては、千年經る松の煙ををさめ、小鹿の角の膠といふものにあはせ、空薫物のえならぬ匂をうつし、あやしき光を添ふる藥だつものをさへ何くれと加へ、上の品より中下の定くさ〴〵に分れ、いろ〳〵に傳ふるとかや。此國にしても、いづれの御門に御時にかりわけむ、みのを山に御幸まし〳〵けるついで、松にかゝれるふぢ代といふわたりにして、つみれける松煙をみそなはし、かれ如何ぞかりのものぞと、試みさせたまひしといふは、まさしく松の上にして、燈火のにはあらざめり、時移り物換り人のすさびも改まり、松のはすさめられて、灯のみ今は里々にあきものし、家々にもてはやせる事となりぬ。なべて衰へ榮ゆるは、萬の理にして、人の上にのみやはある。あはれ我君、天の下しろしめすより、道の光萬明らかに、絶えにし跡もれくれるにあひて、まな百濟の貢絶ゆる時なく、武士の勇める道は更にも言はず。右文の教朝日のはじめてかゞやき、月の弓張はや榮えゆくほど、皆人螢を聚め、雪に向ひ、唐のやまとの言の葉、玉に磨き黄金を鏤む。されど故きをしのびて、新なるをわきまふるにつけて、百の工の道もあやしく妙に、けがなきすさみさへ、くわしく深きに至れるを

見聞く、いづれにをさまれる世の姿なるべし。こゝに古の奈良の都に和泉掾松井のもとやすといへるあり、箕裘の業墨つくれる事をつぎて、文の道稽古の譽も世に轟きたるが、すける心ざし深く、花にそへ鳥につけても、遠祖より傳來し家の風を吹起してむと願ふのつとめ、切に怠る事なし。されどありとある人に問ひて、からのやまとのしながたちども、こゝら製りいづるついでに、車の榻はかりにして、重き二十餘斤の墨を製りいでつ。目もあやし。ひとへに古になずらへて、松の煙をもて調じぬ。圖らず九重の雲の上まで聞上げ、はた關の東の御前はたりも啓し奉りぬる事となりぬ。されど此國の博士のかみ人の國の言の葉ども數多とりよろひ、家の面目限りなき世に殘しぬ。女の文字のかたのみ、いまだそなへねど、これをかまへてよと、ひたすらにすゝめ侍れども、固よりあまさかる鄙に生れて、垣根の小草つかみじかき筆には、伊勢の海深き心もわきまふる才なければ、いはせの山の呼子鳥如何なる音をか立てまじ。さてしも武藏野の露分衣、旅にしあれど見馴ぞなれて、杜の空蟬なほ人からのなづかしき、心を見ては、山賤の垣穗隔てず、柴の戸のしども〲いなひ難く、墨つく筆を試み、そのかたはしをかきつけて、ぬるものならし。

あさせのしるべ（つゞき）

故人　藤井高尙

しうと病にはかたれず

しうの君の、いたくことわりにたがひたることとはせられもし、なしもしたまはゞ、いさむべけれど、わろきながらにさてあるべきほどのことは、したがひてはげしきあしくなりて、よきことといひてもきゝいれられじ、すべてしうの君にはかたれぬものと思ひよりてあるべく、いさむるも、けしきをとりて詞し……し、さてもきゝいれられずば、いひさ……こらさむるぞよき。つねさ……

……に多し。よからぬことなり。……どものあらんをり、さるながらひの人のなさけなげにするはまれなり。さしては人のおもはんこともはづかしく、世にぞしらるゝもうけれど、なさけふかからぬ人にても、むげにつれなくはねせず、かしましてなさけのふかき人は、かゝるをりにころ、人と……こゝろざしを見ね、ちからをもつくすべ……たはりなさせんには……

もすべく、こと〳〵にいさむるはよろしからず。さてはげしきあしくなりて、よきこといひてもきゝいれられじ、すべてしうの君にはかたれぬものと思ひよりてあるべく、いさむるも、けしきをとりて詞しなめきいふべし、さてもきゝいれられずど、いひさして、またことのついでにいさむるぞよき。つゐさうして、あるまじきすぢのことねがふは、いと〳〵あしきわざなれど、さる人に似じとて、ひたれもてにいさめあらそふをよきことのやうに、からびとはいへど、ろはれのがいさぎよき名をとらんとするわざにて、しうの君のため、まことにしみて、ふかきこゝろにはあらずなん。

しんはなきより

はなれぬなからひは、つねにしたしくことになさけをかはすべきことなるを、いさゝかなることゞもうらみうらみて、さるまじき中を、うとくするひと世に多し。よからぬことなり。ゆゝしういみしきことどものあらんをり、さるなからひの人のなさけなげにするはまれなり、さしては人のたもはんこともはづかしく、世にぞしらるゝもうけれど、なさけふかからぬ人にても、むげにつれなくはゐせず、かしましてなさけのふかき人は、かゝるをりにころ、人よりことにこゝろざしを見ゐ、ちからをもつくすべけれとて、とかくにたすけいたはりなどせんは、いといとたのもしきことならすや。

京のいとこに隣かへず

ちかきわたりの人とは、つねにむつまじうすべし。にはかにことのいできたらんをり、となりの人と中あしくては、たのむべきかたなくなん。またさらでも、つねに其事かのこと、かたらひあはせなとせんにも、

夜中曉といはず、ゆきゝすどかり、ちかきわたりならでは、ことゆかぬふしぞおほかりける。はらから、いとこなどいふなるものも、遠きところにありては、たすけとなる事すくなし。

膝とも談合

なにごとも、したしき人に聞ゑあはせもし、よくおもひめぐらしもしてなすべきなり。うちおもふまゝになしては、ことゆかぬすぢ、さはりなどもありて、かる〲しくおもひさだめしことをくやむものぞかし。さいへどとて、あまりにふかくかうがへては、なか〱におもひまどひてあやまることあり。こゝろしてよきほどにおもひめぐらすべし、人に聞ゑあはするも、たのもしうこゝろふかきに、ひとりふたりにてたりぬべし。あまたにては、いろ〱にいひさわぎてようせずど、よからぬすぢによりはつるものになん。

亀のかふより年の功

をさなきほどより、おとなにまさりてかしこき人もあれど、そはまれなることにて、なべては、すこしにても、としたけたる人ぞ世の中のことにしはしみて、おもひやりもふかく、よろづかしこけれど、われよりよはひまさる人には、なひきしたがひて、そのこゝろむけもたどるべきこととなるを、わかきほどには、おい人のさかしらいふはもどかしくて、きゝもいれずかし。おのれもそのつらなりしに、今は五十にもちかくて、やう〱むかしのひがこゝろゑの、くやしうおもひしらるゝは、たれもおいゆくまゝに、さやうにこそあるらめ。

朱にまじはれどあかくなる

人のこゝろは、つきくさのうつりやすきものにしあ

れど、をさなきほどは、ちゝはゝのおもむけにしたがひ、おとなになりては、みづからこゝろして、あしき友とまじはらぬぞよろしかりける。また歌よみならふ人の、きゝとりやすく、題のあまたありて、たよりよきまゝに、ちかき世の歌あつめたる書どもを、明くれ見などすれど、おのづから、よみいづるうた、むげにこゝろあさくなるものなりかし。

なすやうにならいでなるやうになる

世のなかのことは、よくなるもあしくなるも、みな目に見えぬ神のみしわざなれど、いかにちからをつくしても、よくなしえがたきことのあるを、しひてなさんとするは、神のみこゝろにさかふことなるゆゑに、いよ〳〵あしくなりゆくべけれど、そのすぢはとゞめて、またこと〴〵をなすべし。ちからをいれずして、おのづからすみやかになることもあれど、さるこゝろして、しひたるわざはせざらんぞよき。

○をしへやうのことを、かなふみにかゝるふみども、世にあまたあれど、からことのはかせのあらはせる、または法師のものしたるなどにて、おのがじゝたてたるおもむきをのみ、こゝろをやりていへるものなれど、みな一むきにかたよりたるさだめぞおほかりける。和論語といふものは、おほくの人のよきこといへるを、とりあつめてしるしたるふみなれど、それはたむかしの人々の、みづからこそよしとおもひていはれけめ、こと人はよしともおもふもあり、いかにぞやおぼゆるもあるべし。かみのくだりしるしたることぐさは、たがいひいでたる言がしられねど、世の人、みなげにさることゝおもへども、なべてつねにいふなれど、たれもわろしとはおもふまじく、みゝちかきたとへ言は、きゝとることもかたからず

して、今の世にふる教は、このことぐさにしくものあらじ。かくめでたきものなれども、むげにいやしきさとびごとなるからに、ひとみな、なほざりにいひちらすばかりにて、ふかくこゝろとゞめておもはねば、おどろかしがてら、おのれが、ちかきころおもひよれることゞもをさへにいひ出たるは、ひがことぞおほからん、みん人よろしきをゑらびとりてよ。

（をはり）

長崎の龜女

故　山崎美成

肥前長崎に、名を龜といふ女子あり。その父鑄物をもて業とせり。男子なく、唯龜娘あるのみなりけり。よりて、鎔工の造法をもて、龜娘に傅ふ。龜娘かつて絶技の名あり。その人となり豪放不羈にして、酒を好み、常に丈夫と交り遊び、家産いと貧しけれども、生計を意とせず。たま〳〵好事の物ありて、預め數十金をあたへて、銅器を製せしむることあれど、先その金をもて酒殽を賒りもとめ、鄉黨の老少を招き集めて、日毎に宴樂酣飮して後、工に就きて製作するところ、銅色文采、その精巧絶技、殆、賞するに堪へたり。そのころ、鎮臺某、執政の命をうけたまはり、かの龜娘をして、香爐をつくらしむる、一年强半を過ぐれども、漫爾として、さらに造るべき氣色もなかりけるが、とかくするうちに、はやく、鎮臺の任もはつべき時なれど、鄉吏をして促し造らしむ。幾程なく、香爐成れりといへども、いかなるよしにか、敢て進らず。よりて鄉吏、人多く率ゐて、その家をとりかこみ、いと嚴に責めはたりけれども、龜娘はいさゝかも、意に挾まず、豪放ます〳〵甚しか

りき。ある時、その香爐をもて案上におきて、烟草くゆらしつゝ、つくづくと打ながめ居たりしが、風致の心にかなはずとて、大なる斧を持來り、一聲のこゑとともに打砕き捨てたり。鎮臺任滿ちて、東歸の日至れりといへども、香爐はつひに調はずなん。達藝の人は、勢をもてその守を奪ふべからざることろの例少からず。(名家略傳)

おきの玉藻(十一)

永石徳文

貨は國のもと

貨は國のもと、財は國のいのちなるゆゑ、平天下の章に、財をなす事をとき給へり。くにいへをたもつ人此の道しらでやあるべき。ものよみする人、仁義禮樂の事は、文にもあらはし、ことゞにもいへど、財用の事いふはすくなし。是は人のすきこのみていへる事なれど、われいはずともと思ひ、義をさきとし、利をのちとして、人にゆづるもあるべけれど、たかきもいやしきも、たからなくして、何事をかなすべき。許魯齋の學者は生をさむるをもてさきとすといへる、そしるべきにあらず。されど財をなすといへるは、そのつかひをほどよくする事をこそいへ、しもをそんじて、かみをまし、人をやせしめて、おのれをこやすにはあらず。(たはれ草)

さかりて入れど、さかりていづ

もろこし人のものがたりに、或人ともだちかたらひて、山のふもとをとほりしに、此の山に虎ありて、人をくらふ、此の虎をころしたるものあらば、十萬貫をたまふべしと、榜文たちたるを見て、大によろこ

び、うでまくりなどし、そのまゝかけあがらんとするを、かたへの人ひきとゞめ、いのちはをしからずやといへど、たからだにもちたらば、いのちは何かをしからんとこたへしとかたりき。おろかなる人のこころざし、まことにをかしき事なれど、たからあつめするもの、人のうらみ、そしりをも、かへり見ず、さかりて入れど、又さかりて出る事のいかほどもいでき、つひにはその身もあやふくなり、家もほろぶるにいたれる、なにか此のものがたりにことならん、漢の帝の西園の禮錢をたくはへて、人のこゝろ日々にはなれ、火德のきゆるをればね給はず。董卓が郿塢のこめをあつめて、はぞのうへに火ともす事をしらざる、まことにいたましといふべし。かゝるゆゑにより、たからあつまるときは、民散ずとはのたまひけめ。(同上)

人をあはれむべきこと

富貴なるはよけい他へこぼるゝ物なれど、人の出入ありて、にぎやかなり。家うるはふ物也。されどもその人貪欲ふかく、他よりは非道の事にて利錢をとり入れども、人には一錢もほどこさじとするたぐひあり。かやうに不義にして富る時は、あやふくしてながく子孫つゞく事なし。富にしたがひて人へものをほどこせば、人の出入つよくして、うやまふもの也。富ても慈悲なければ、人うとみて出入なく、かへりてにくみそしるゆゑ、自然に淺ましき評判をうくるもの也。范文正公といひし人は、始は貧なりしが、後は高官にのぼり、家富しに、われかやうに富る事先祖の積善ゆゑなり。われ一人うけんは面目なしとて、一門の人々に田地を買あたへ、あるひは飯

米衣類等迄あたへけるとなり。今の世の人は富るといへども貧なる親類には、目もかけず、出入するをさへうるさく思ふなり。富貴なる人貧なる親類の所へはけつかう成ていにて行べからず。供人大勢にて行たり共、皆そとにてきひそか成ていにて入べし。（子孫寶草）

。。。。。。。

勝負のあそびはすまじきこと

萬のあそびにも勝負あるなぐさみをこのむ人は巳かちて興とせんため也。碁双六もまけては無念に思ふものなり。わが勝て人にはいなく思はせて、わが心をなぐさめんとする事、徳にそむけり。したしき友とあらそふに、その友の心をはかりあざむきて、巳が智恵のまさりたるを興とする事、是又禮にあらず。始めは興よりおこりて、ながき恨をむすぶたぐひ多し。是皆勝負のあそびをこのむ失なり。人に勝んと思はゞ、道をまなびて勝べし。學文をしては、必ずなほに成て、仁義の道に入は學文の力なり。是人にかまはずして、人にすぐるゝは勝道理なり。（同上）

。。。。。。。

無益の藝は身に要なし

藝は身をたすくるとはいへども、多くは身をやぶるものなり。無藝なるものは、身に慢なくして、つゝしみ有故に、人にもにくまれず、一生何事なく身ををさむ。一藝有ものは人に惡みそねまれ、又藝ゆゑ身をくるしむる事もかず〳〵なり。奉公人も一藝有人必ず浪人するものなり。たとへばよくおよぐ者はおぼれ、よく乘物はおつるが如し。わがなるわざに必ず心をつくべし。

わがすく食事にて、必脾胃をやぶり、病を生じ命を

つゝむるものなり。わがすくわざにて氣をくるしめ耻をかき、身をそこなふ事おほし。すく事に必氣をつくすべし。(同上)

仁者のいさみ

人の命三千界のたからにもまさるといへり。何やうなる乞食にても命を金にうるものなく、詩人は春霄の一刻あたへ千金なりと思ひて、たのしめり。されば人死する事をおそれにくまば、存命の悦びを日々にたのしむべし。おろか成人は、此たのしみをわすれ、身をあやふく、他の財をむさぼるには、心にみつる事なく、人皆生をたのしまざるは、死をおそれざるゆゑなり。死をおそれざるは、死のちかきを去らぬゆゑなり。

命をば泰山よりもおもく、大切にすべし。然れども、時にあたりて、禮のために身をくるしめ、義のために命をすつる事は鴻毛よりもかろくすべし。是仁者のいさみなり。(同上)

しみのすみか (つゞき)

石榑千亦

(に)桶工暴風をよろこびし事

都のはしつかたに、桶をつくりてうる男あり。秋の頃風はげしくふきいでゝ、よろぼひたる家をうちたふし、木の枝をさへをりさきなどす。ひはだやの板のはがれたるが、空にとびかふさま、さながら、たふけの神に、ぬさまゐらする心地す。桶つくり妻に向ひて、わが家たからに富むべき時來ぬ。とく神の御前に、神酒粿米奉りてよといふ。妻野分はげしかりとて、家の富むべき道理やはある。けふの事い

ふ男かなどいへど、女はあさましきまで、ものゝ意をたどりしらぬもの也。むかしから國に、朱買臣といひしかしこき人、わが身今になりいでなむといひけるを、その妻のきゝも入れで、終にわかれけるがほどなく、夫はいみじき位を得たりけるを、くやみつるためしもぞある。すべて男のいへることを、あなどりざまにもてなさど、よき事はあらじといふ。妻さらどかゝる風につけて、何條よきさちあるといへど、夫がいはく、風あらくふきぬれど、砂はこり起りて、人の眼に入るぞかし。されど目をやむ人多くいできなむ。これよろこび祝ふべき事にこそといふに、妻愈いぶかりて、人の目をやむが、いかで我身の幸とはなるととへど、夫ふかく物のこゝろたどろさる人は、其のよしをえさとらじ。目を煩ふ人多かれど、ようせずど目つぶれて、かたはとなりぬべし。さるかたはになりなど、法師とこそなるべけれ。盲目法師は、ちかき代にから國よりわたしたる、三絃といふものひきて、なりはひとすなり。さらど三絃世の中に行はれぬべし。これわがためによきさちの來れるなりといへど、妻しか三絃の世にはやりゆくとも、身の幸となるべうもなしといふ。夫ろも三絃は、ねこまの皮をもてつくるなり。三絃のはやりゆかど、世にありとあるねこまのかぎり、殺されてたねつきぬべし。これよきさちのまぢかく來れるなりといふを、猶いぶかりてとへど、ねこま死に絶えなど、鼠時をえて蔓り、厨の棚、さずきをいはず、こゝらの鼠はこりさわぎ、よろづの桶ども皆くひやぶりあるは投落して、砕きそこなひつべし。さらどわが家におきものゝ數まさりて、富み榮ゆべきものなるはやと、手うちたゝきて、をどり喜びけり。ふ

かきたどりある桶たくみにぞありける。
一寸さきのわからぬ世に、はかなき後の後のことに頼みをかけて、あらかじめ喜び祝ひ、酒殽あるじして、しかも得る所なき輩、世には少なからぬものなるべし。されど、この桶工ばかりのは稀なるべし。しかも、其のいふこと、一々序ありて、いとおもしろく、實にもと傾かるゝふしなきにしもあらぬは、蓋し作者靈筆の然らしむる處ならむ。一讀三嘆三笑。

（は）人宿して物とらむとせる女の事

田舍わたらひして、絹あきなふあき人、日くれぬれど、ある家の戸を叩きて、宿からなむといへど、うけひきて、あけていれけり。主の妻は、恐ろしき心もちたるものにて、この旅人の、つゝみの重りかなるを見て、いかでこのつゝみわすれてゆけがし、わがものにしてむとおもひて、あるじにさゝやきいへど、茗荷をくひたる人は、心惚けて、物忘れするなりといふをきゝて、菜のみの、皆茗荷をいれてくはせつ。さて商人は、あけぐれの空にたきいでゝ、立ちてゆきぬ。妻は旅人のわすれたるもの見むと、寐たる處にいりて見れど、つやつや物一つなし。くはせつる茗荷は、しるしなかりけりといへど、あるじいな茗荷こそしるし有りけれ、いみじき物わすれて行ぬといふ。妻なにをか忘れたるとゝへど、われに與ふべき粮代のせに、わすれていにけりといへど、妻げに〳〵といひて、愈腹だちけり。人をはかりて、ものとらむとして、かへりておのれ損をしたりける。はらぐろなる心は、つかふまじき物にぞありける。

人をはからむとして、中々におやまりぬ。あきし

口もふたがらざりけむ。あはれ、ねたみ、そねみ、ぬすみ、かたり、皆遂にこの類に陥らざるは、蓋し稀ならむ。世にいはずや、人をのろはゞ穴二つと、しかも一つにて足れり。人をいれむとする處、人は入らで、わが入るに適ふべければなり。

（をはり）

雨月物語

故人　上田秋成

白峯

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉見過しがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の烟、浮島がはら、淸見が關、大磯小いその浦〳〵、むらさき艶ふ武藏野の原、鹽竈の和たる朝げしき、象潟の蜑が笘や、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葭がちる難波を經て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行々讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく筇を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり。この里ちかき白峯といふ所にこそ、新院の陵ありと聞て、拜みたてまつらばやと、十月はじめつかたかの山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の輕靡日すら小雨そぼふるがごとし。

兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳だちて、千仭の谷底より雲霧おひのぼれば、咫尺をも鬱悒こゝ地せらる。木立わづかに間たる所に、土墩く積たるが上に、石を三がさねに疊みなしたるが、荊棘薜羅にうづもれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、さらに夢現をもわきがたし。現にま

のわたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百の官人は。かく賢き君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし、近衛院に禪りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁させ給ふを。思ひきや麋鹿のかよふ跡のみ見ゑて、詣つかふる人もなき深山の荊の下に神がくれ給はんとは、萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふもの丶おそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて涙わき出るがごとし。終夜供養したてまつらむやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて、經文徐に誦しつ丶も、かつ歌よみてたてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを
　かたなく君はなりまさりけり

猶心怠らず供養す。露いかばかり袂にふかゝりけん。日は沒しほどに、山深き夜のさま常ならね、石の牀木葉の衾いと寒く、神清骨冷て、物とはなしに凄じきこゝちせらる。月は出しかど、茂きが林は影をもらさねど、あやなき闇にうらぶれて、眠ることもなきに、まさしく圓位〳〵とよぶ聲す。眼をひらきてすかし見れど、其形異なる人の、背高く瘦れとろへたるが、顔のかたち、着たる衣の色紋も見ゑて、こなたにむかひて立るを、西行もとより道心の法師なれど、恐ろしともなくて、こゝに來たるは、誰と答ふ。かの人いふ。前によみつることぞのかへりごと聞ゑんとて見ゑつるなりとて、

松山の浪にながれてこし船の
　やがてむなしくなりにけるかな

喜しくもまうでつるよ、と聞ゆるに、新院の靈なることをしりて、地にぬかづき涙を流していふ。さり

とていかに迷はせ給ふや。濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ、今夜の法施に隨縁したてまつるを、現形し給ふはありがたくも悲しき御こゝろにし侍り。ひたふるに隔生即忘して、佛果圓滿の位に昇らせ給へと、情をつくして諫奉る。新院呵々と笑はせ給ひ、汝しらず。近來の世の亂は朕なす事なり。生てありし日より魔道にこゝろざしをかたぶけて、平治の亂を發さしめ、死て猶朝家に祟をなす。見よ〳〵やがて天が下に大亂を生せしめんといふ。西行此の詔に涙をとゞめて、こは淺ましな御こゝろばへをうけ給はるものかな。君はもとよりも聰明の聞えましませば、王道のことわりはあきらめさせ給ふ。こゝろみに討ね諮すべし。そも保元の御謀叛は天の神の教給ふことわりにも違はじとておぼし立せ給ふか、又みづからの人慾より計策給ふか、詳に告せ給へと奏す。其時院の御けしきかはらせ給ひ、汝聞け、帝位は人の極なり。若人道上より亂す時は、天の命に應じ、民の望に順ひて是を伐。抑永治の昔、犯せる罪もなきに、父帝の命を恐みて、三歳の體仁に世を禪りし心、人慾深きといふべからず。體仁早世ましては、朕皇子の重仁こそ國しらすべきものをと、朕も人も思ひをりしに、美福門院が妬みにさへられて、四の宮の雅仁に代を簒はれしは深き怨にあらずや。重仁國しらすべき才あり。雅仁何らのうつは物ぞ。人の徳をえらばずも、天が下の事を後宮にかたらひ給ふは、父帝の罪なりし。されど世にあらせ給ふほどは孝信をまもりて、勤色にも出さゞりしを、崩させ給ひてはいつまでありなんと、武きこゝろざしを發せしなり。臣として君を伐すら、天に應じ民の望にしたがへば、周八百年の創業とな

るものを、ましてしるべき位ある身にて、牝鷄の晨する代を取て代らんに、道を失ふといふべからず。汝家を出て佛に婬し、未來解脱の利慾を願ふ心より、人道をもて因果に引入れ、堯舜のをしへを釋門に混じて朕に說やと、御聲あらゝかに告せ給ふ。西行はいよ〳〵恐るゝ色もなく座をすゝみて、君が告せ給ふ所は、人道のことわりをかりて、慾塵をのがれ給はず。遠く辰旦をいふまでもあらず。皇朝の昔譽田の天皇、兄の皇子大鷦鷯の王をおきて、季の皇子菟道の王を日嗣の太子となし給ふ。天皇崩御給ひては、兄弟相讓りて位に昇り給はず。三とせをわたりても猶果べくもあらぬを、菟道の王深く憂給ひて、豈久しく生て天が下を煩しめんやとて、みづから寶筭を斷せ給ふものから、罷事なくて兄の皇子御位に即せ給ふ。是天業を重んじ孝悌をまもり、忠をつくして人慾なし。堯舜の道といふなるべし。本朝に儒教を尊みて專王道の輔とするは、菟道の王。百濟の王仁を召て學ばせ給ふをはじめなれど、此の兄弟の王の御心ぞ、即漢土の聖の御心ともいふべし。又周の創、武王一たび怒りて天下の民を安くす。臣として君を弑すといふべからず。仁を賊み義を賊む。一夫の紂を誅するなりといふ事、孟子といふ書にありと人の傳へに聞侍る。されど漢土の書どもがりいまだ日本に來らず。此書を積て來たる船は、必しも暴風にあひて沈沒よしをいへり。これはいかなる故ぞといふに、我國は天照すおほん神の開闢しろしめししより、日嗣の大王絶る事なきを、かく口賢しきをしへを傳へなば、末の世に神孫を奪ふて罪なしといふ敵も出べしと、八百よろづの神の惡ませ給ふて、神風を起して船を覆し給ふと聞、されど他國の聖を教

も、こゝの國土にふさはしからぬことすくなからず。且時にもいはざるや。兄弟牆に鬩ぐとも外の侮りを禦げよと、さるを骨肉の愛をわすれ給ひ、あまつさへ一院崩御給ひて、殯の宮の御廟もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て、寶祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ、天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとへ重仁王の即位は民の仰き望む所なりとも、徳を布、和を施し給はで、道ならぬみわざをもて代を亂し給ふ則は、きのふまで君を慕ひしも、けふは忽怨敵となりて、本意をも遂たまはで、いにしへより例なき刑を得給ひて、かゝる鄙の國の土とならせ給ふなり。たゞ〳〵舊き讐をわすれ給ふて、淨土にかへらせ給はんころ願まはしき叡慮なれと、はゞかることなく奏ける。（未完）

克己といへることにつきて

松下清風

指折り數ふれば、今より既十五六年前の昔語りとなりにけり。わが齢尙十二三にて、田舍の小學校に在りける頃、われは、學校の餘課として、舊藩の老學者某の私塾に通ひ、史記、文章軌範などの講義を聞き居たる際なりしが、一年、今は世に亡き家兄、東京より暑中の暇を得て、歸り來ませるが、日夕、わが讀書、作文を撿じて、われを監督すること、甚嚴かなりき。しかれども、われは當時年齡に比して、學業の進歩せる方なりしかば、學課の撿閲は、さして苦痛を感ずること無かりしも、われは、性質、兄の嚴格に比し、頗る温和にして、又極めて臆病なりき。尤も、われは、兄に對する非常の崇拜家にして、其の一言一行を模範とせるのみならず、兄の性、嚴

に過ぎ、動もすれど、人と忤ふことあり。曾て、暴横を以て郷曲に聞ゆる、ある惡少年の群の爲めに、狙はれたる際の如きは、兄の抑止するをも聞かず、窃に尾して、常に救ひ參らせんとしたることなどあり、かゝる際には、われながら驚くばかりの勇者となれるを覺えにき。其の頃、近村に、西洋諸國を巡歴して、歸朝したる、輕業師ありけるが、其がもとに新に弟子入りしたる文助と呼べる少年は、當時九歳ばかりにして、學校にて、時々われより敎授をうくることなどありしが、文助は、ある士人の私兒にして、其の母なるものは、もとより賤しき身柄のものなりけれど、文助の成長も甚よろしからず、同級の生徒には、常に彈指せられて、たれとて親しく交はるものもあらざりき。かゝるものなりしかど、その母も、學校より、暇をとらせ、輕業師のもとに弟子奉公に仕ませたるなりしなれ。しかるに、文助は、かくいやしく育ちたるため、學業には、至つて鈍ましかりしも、矯捷さながら猿の如く、且膽あり、辨ありて、かゝるわざには、極めて適せる生れとて、その師も、ことの外、目にかけ技藝を習はせをきたりしに。輕業師のことゝて、ある日、長き竹竿の上に、攀ぢ上らせ、さま〴〵に手足を働かしめ、竿の上にて跳り樣のこと習はせ居たりし際、いかなる機會にやありけむ。二丈餘もある高處より眞倒樣に、突き落とされ、池中に陷入して、腹部を傷け、一時は、生命も危しなど噂されたることありしが。かゝる悲しき目に逢ひたる文助、流石は、そのわざの名人にもなるべき天命をや有したりけむ。少しも泣き叫ぶなどのことなく、たゞわが技倆のいたらぬためなるべしなど、語らひ、毫髮く色なかりきとて、郷人

語り傳へて、一時の異聞となしにき。されども、こは、其の士人、及びかれが私生の母が、其の兒を遇することの無慘なるを責むると、その兒の薄命を憐むとの意より、此く様々に噂せるものにして、もとよりこれがために、文助の矯捷と、氣膽を稱するには非ざりしや明かなり。されど、このことを語り傳へ聞き傳ふもの、皆一槩に酸鼻せざるはなかりき。われも亦學校にて、かれを知れるのみならず、わが學校に在るや、彼れに對し、常に慈善家の地位に立ち、半紙、石筆などを分ち與へ、出校の遲刻を責めらるゝを知るや、われはかれに代り、教師に陳謝したることも屢なりき。そは、かれの遲刻は、わが怠慢のしからしむるに非ずして、其の伯父母などに驅使せられ、已むを得ずこゝに至れるを知る、われの幼き同情の發動よりせるものなりき。無賴の兒、賤民の私生兒とて、人の齒列するものなき、かれを、學校にて、かれが同輩は、勿論たれとて、かれを庇ふものとてあるべき筈なく、當時上級に上席を占むる我一人の保護は、かれに取りて實に暗夜の一燈なりしなり。われはこの風說に、又もや小さき胸を轟かし、いかにもして、かれが不幸を救はむなど志せしこともありしが、當時歸省中の、わが兄、一日このことを聞きて、文助が膽氣の愛すべきを稱し、思へど、われも此くの如き膽勇ある弟の欲しきかなど、長大息して、さながらわが平生の怯臆を責むるが如くなりしかど、われは、そのことの深く肺肝に徹するが如き心地して、坐をさがり、讀書作文の道に於いては、當時全校に匹敵無きわがみを以て、郷曲に齒せられざる、かれ文助にだも、及ばずとせらるゝは、其の膽勇の足らざるためなるべしと、いたく自ら悔み、

わが平生崇拜し、信仰する家兄の、かくもわれを賴み少く思ばさるゝかと思へど思ふ程、膽力の價値多きことを羨み、われとて、習ふて到らざることやあると。これよりいろ〳〵心に工夫して、恐怖に克つことを學び、當時最も恐しきものとしたりし雷鳴の如きは久しからずして、却て之れを聞くを樂しみとするに至れりき。又當時、家庭にありて体罰の最も重き仕置場として、之に押籠めらるを、何よりも恐しきものも信じ居たりし屋彼の巨大なる土藏の幽暗なる窓下に、一冬むかり自ら籠り居て、書を讀み、膽を錬るのところとなしたりき、十六七年前のこと、夢の如く、霧に似たり。

ちかごろ、牛込の山中に在り、閑に乘じ、西洋の御伽草紙樣の、ノヴェルを繙き。ある少女朋友の神の愛を、說き聞かしたるより、己が怯臆を悔い、暗き室内に獨り居ることを恐れざるに至れりてふ物語を讀み、うたゝわが少時の思ひ出でられて、かくは、無用の筆墨を走らし、諸嬢の一粲に供することゝはなしぬ。

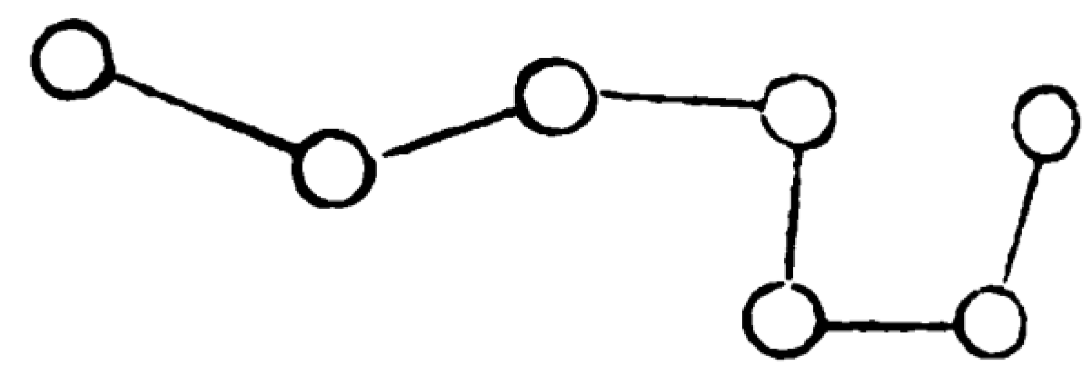
紋帳圖式綱目

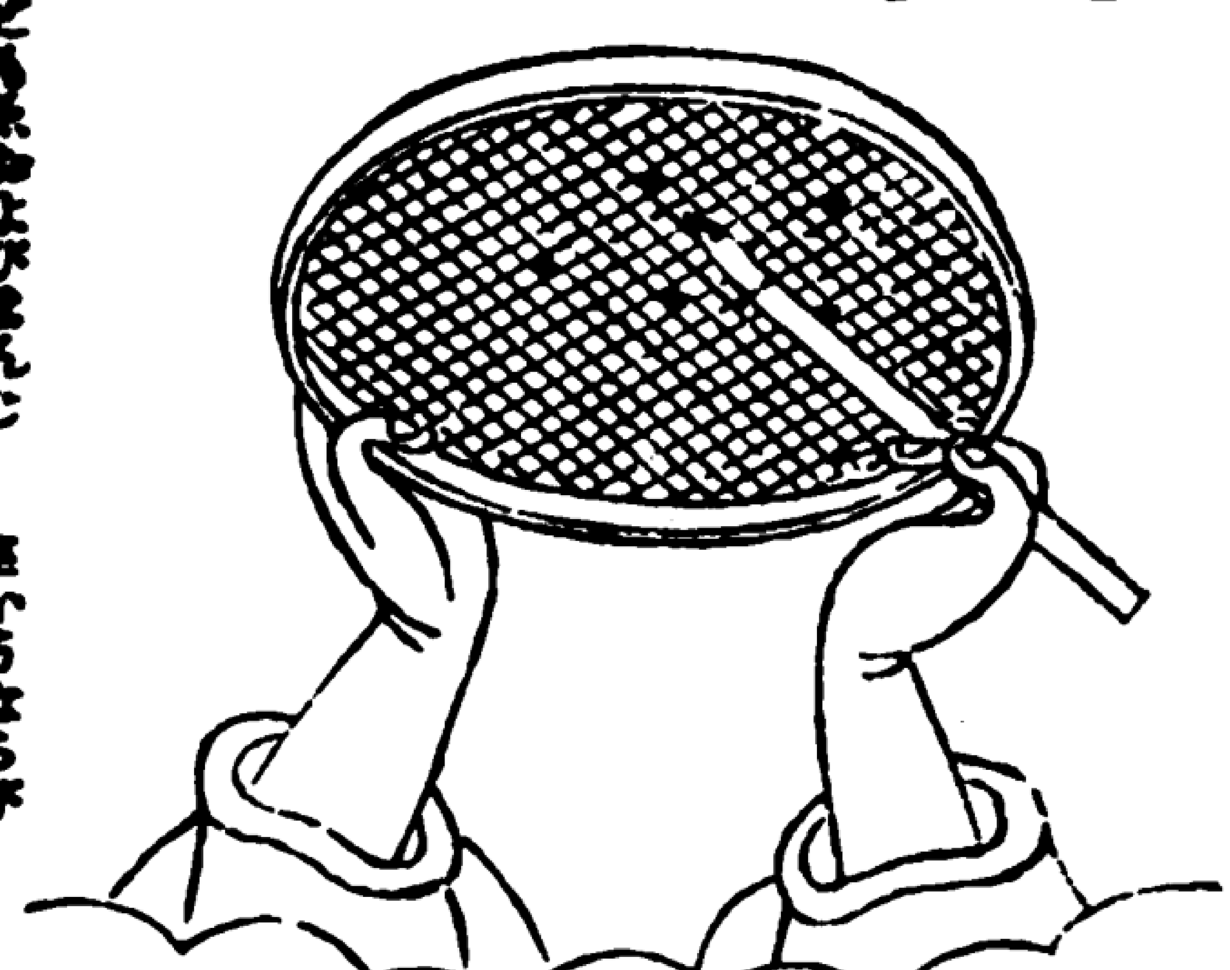
井上賴文寄贈

こは、寶曆十二年に著したる一小冊子にして、書き樣の、解し難き節もあれど、また、めづらしきふしもあれば、家庭の參考にもとて、こゝに載せつ。

●大を小に寫す法

絹布か又はすきとほる紙を以て、丸、或は角の臺に張り、圖の如く星に指しあて、目をはなさず、筆に

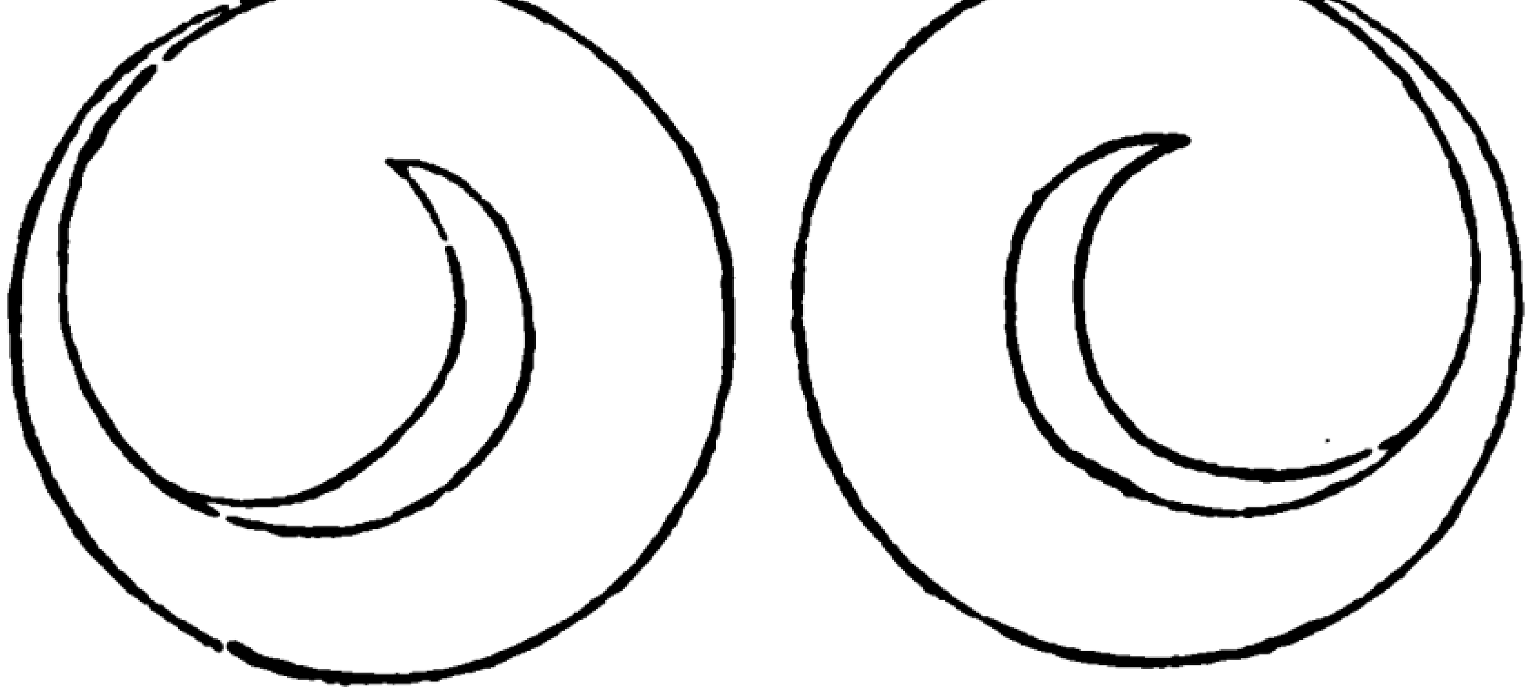




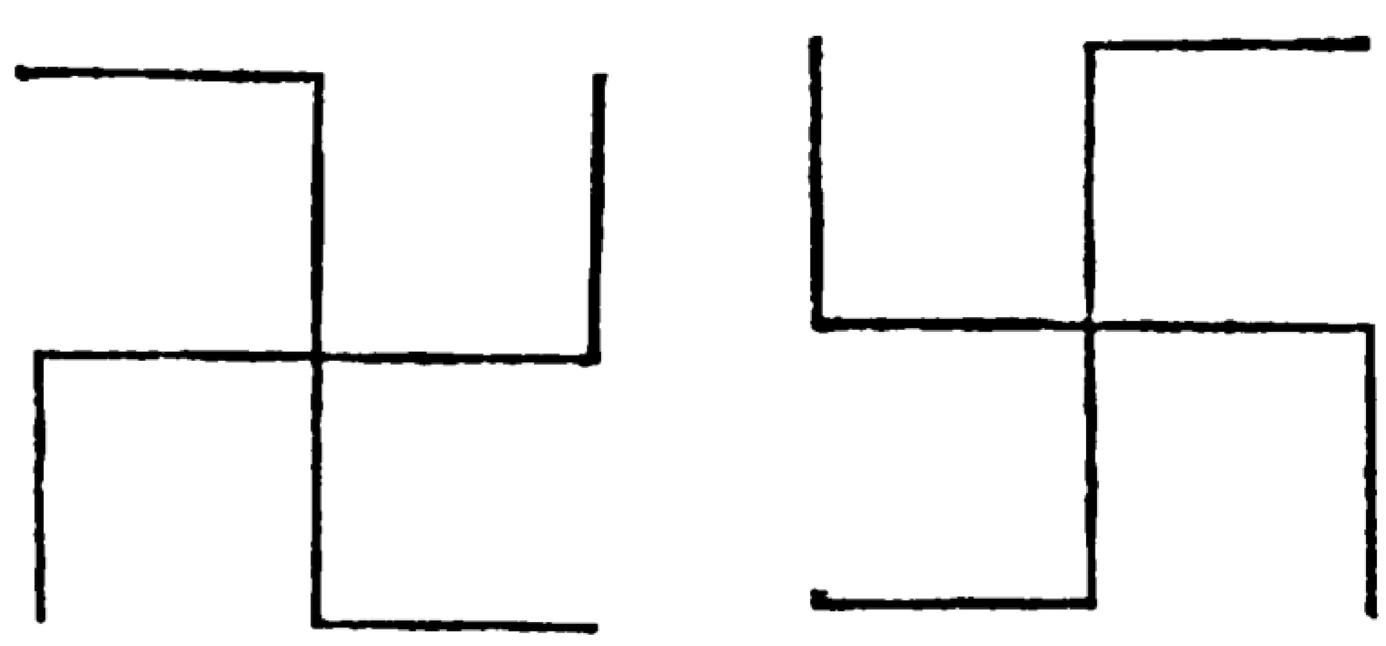
て點を打つなり。少しも列違はず寫る。又山など、總べて生うつし、大を小にすき寫す便りにもならんかとてこにしるす。

●巴及萬字の左右幷に二重輪、陰輪圖解

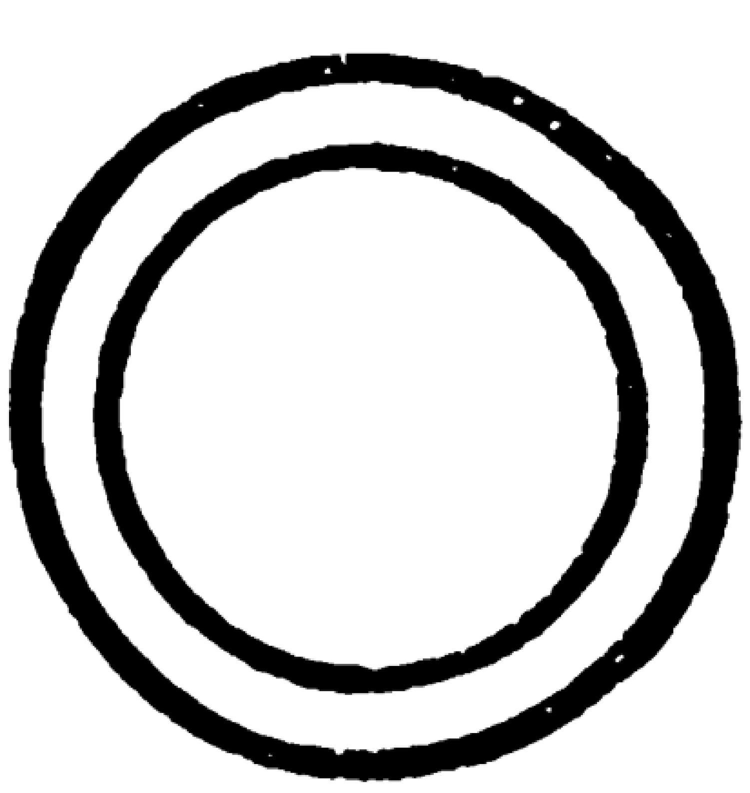
左巴　右巴



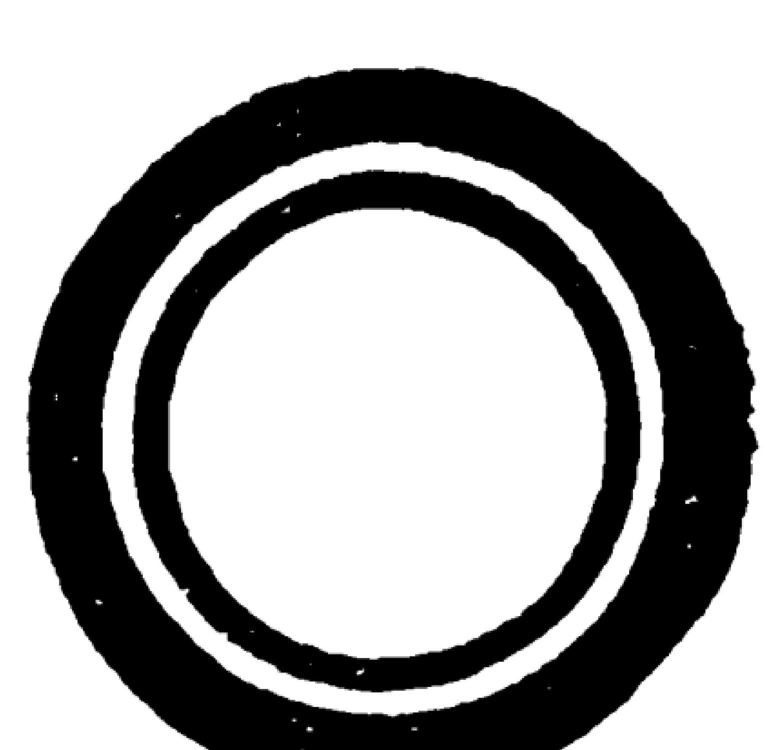
右まん字　左まん字



二重輪

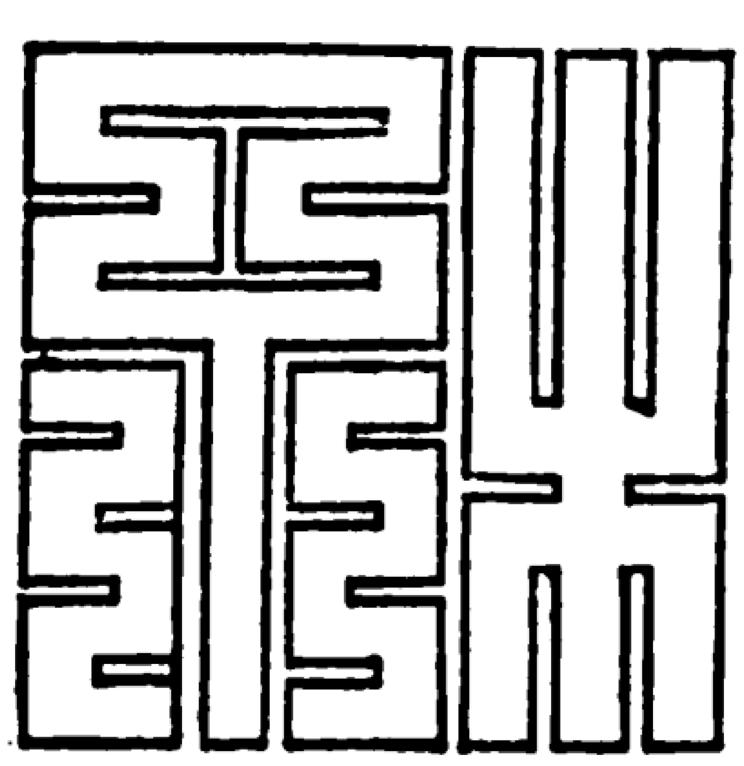


陰輪

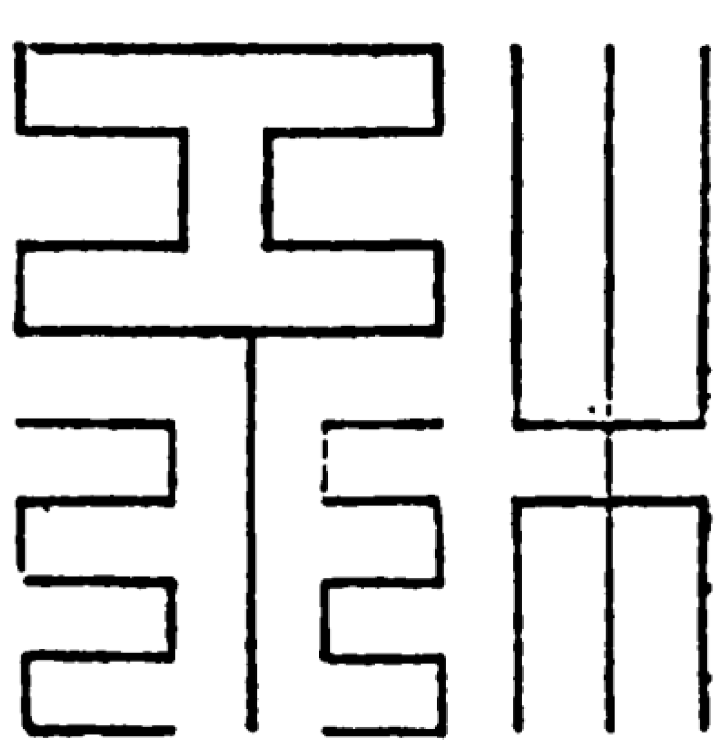


●松の文字

角字は何にても八つ割りを以て定め置き、下たにしるす圖の如



く一筋書きに認め、其上ふとく籠字に寫すべし。上の如くなるなり。



●紋所割方

これまで世間に流布いたし來る割方は、尺にて一寸の紋所三つ割りの時、一寸づゝに分廻を廣げてわれ

ば則三つわりとなる。又四つ割り紋何分何厘。五つわりは何程何毛。いづれにても、分廻と算法にてかんがへしるといへども、此の度あらため新撰の割り方、初心の人のために、紋の割り方の圖を作り、註を加へて一より十六まで、其外割り方しな〳〵委細にこれを記す。巧者の人は見るにおよばず。

一、割方一ヶ所の内にて、紋所書方、二ッ三ッ四ッ程つゝ部分してしるす。

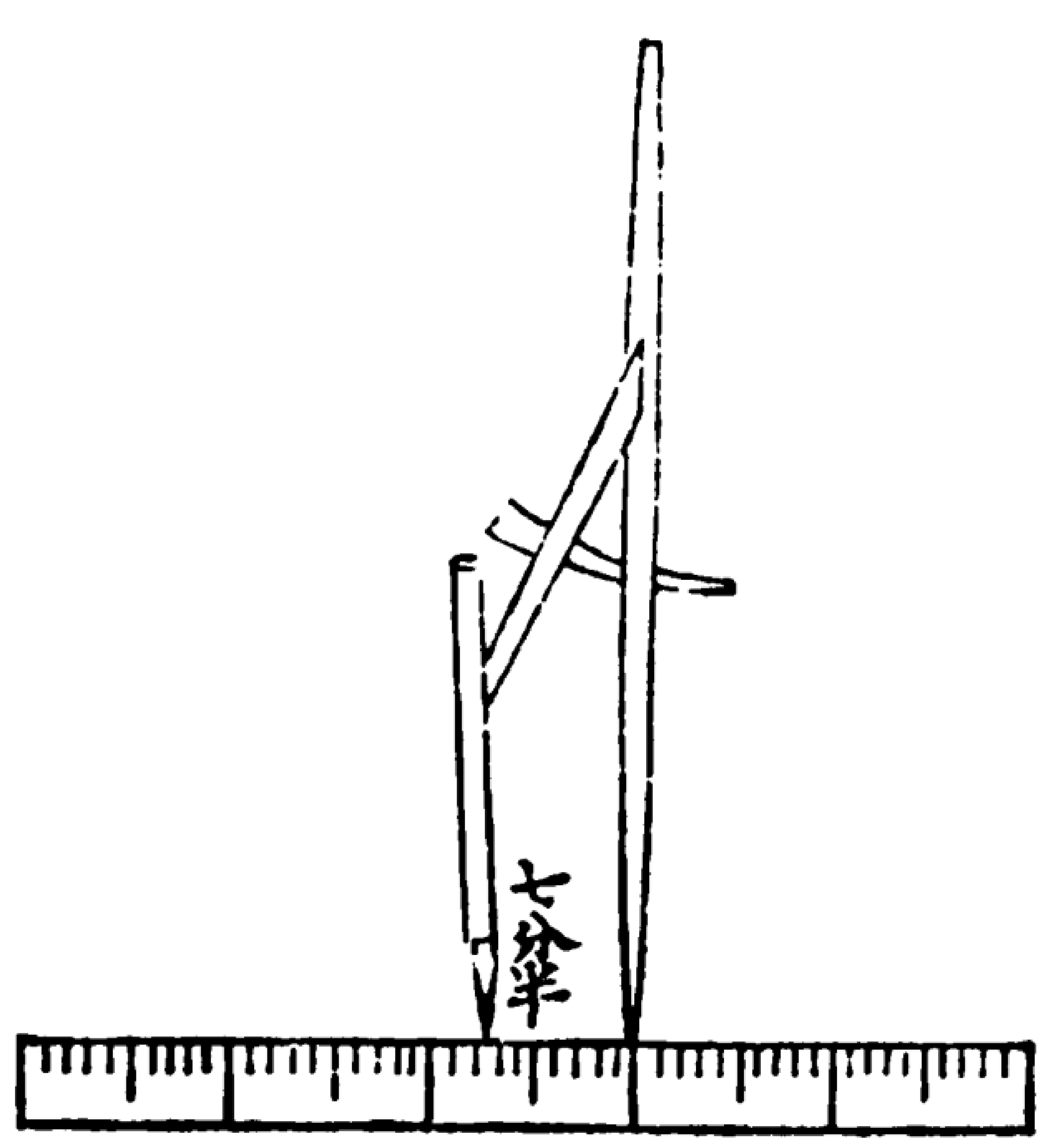
一、算勘に及ばず、一切紋所のわり方、分廻のつかひ方一通りにて、いかやうの六ヶ敷割方にても、委細に出來いたす事。

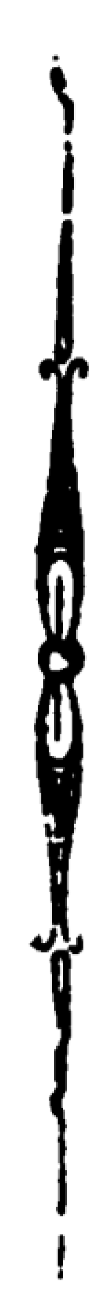
一、紋の割書の内に、○如此印あり、これはぶん廻の針穴としるべし。

一、紋所書仕立る節、第一紋の割法をよく定め置き、下書をいたして後に外の紙にて寫し、清書有るべき事。若又厚紙、あるひは板の類なれば、下書して、香箸やうのほそき物にて被付べし。又被付られかたき品は、形にはりてすりこむべし

一、分廻をひろげ、何寸何分と尺にあて、寸法を圖のごとく取るべし。

一、圖を以て割方知れがたき時は、いづれにてもぶん廻の針穴へ針を建てゝ考ふべし。其道理しれずといふ事なし。





東京廿四景（五）

菊園の翁

愛宕山

都の中、芝區の市街の間にあれど、櫻川といふ名もかぐはしきいさゝ小川をへだてゝ、丘一つよづれば、全く別乾坤の心地す。山に愛宕の名あるは、愛宕神社あればなり。仰げば鼻孔、天に朝するばかり急なる數百級の石磴を男坂と名づけ、その側にありて屈折して登る石の坂路を女坂といふ。なべて男は剛をむねとし、女は柔を旨とす。されど、剛柔大小先後を男女にかたどりて物の名につくる事、ひとり此の坂のみならず、男波女波の稱あれど、男瀧女瀧の稱もあり。日光山にも男体と女貌との稱あり。女貌一に如寶ともかけり。かく物に男女の名を附して、男は剛かるべきもの、女は柔くあるべきものとをしへたる古の賢者の心、いとめでたし。



崖に臨みて、休み茶屋、いくつとなくかけわたして

遊人の休息に便にす、全都百万の瓦鱗を眼下に見おろし、芝浦の千檣萬帆を縹渺の間に望むなど、いひしらずをかしき景色なり。春は櫻花、都の錦をさらし、夏は綠陰、日のあつさを洗ふ。月に宜しく、雪によろしく、納涼に尤もよろし。黃塵十丈、蒸すが如き市街の家を後にして、坂ひとつ登れど、涼風萬里より來り、身はまた黃塵の中にあるを知らず。くれゆきては紅燈萬街にかゞやき、洗ふが如き蒼天に月輪孤なり。やがて夜更け、人定まれど、萬籟たえて、櫻川の水、はじめて潺湲として高く、きらめく星と相語るが如し。都門此の好山水あり、人間、必ずしも暑を函嶺もしくは鹽溪に避くるを要せざるべし。さるにても、小隱は山にかくれ、大隱は市にかくる。此の山はそれ山中の大隱ともいふべきか。

この年頃、愛宕館といふ料理屋、此の山の一方にたてられぬ。幾層の高閣、かの淺草の凌雲閣と好一對のたてものなり。山に登るは男坂と女坂との二のみなりしを、此の館出來てより女坂よりも更に平かなる路出來たり。これを何とか名づくべき。われは命じて新男坂といはむ、當代の男は腸くさりて、女子よりも柔なればなり。

朴平　第三

白魚女史

朴平がけふこのごろ花を見んずる心あるべうもあらず、はた競舟に何の興かうふむとも見えず、春野と云ふは、興風といひて今は法學士、法文と道は異れど、文雄とは二つなき友にて、春野は快活に、文雄は沈着にて、さるきは異りたれど、春野も學問に熱心なるものから、よく文雄とも言葉かたきと成り、

十年の同窓、文雄の友と云ふは、唯此の人のみ。春野は快活なるからに、又よく樂み、よく遊びつゝ、文雄がつひに讀書にのみ沈むを、あまりと時々は批難もすれど、大方は心の互に遇ふものから、校を出でてよりも、折りふしはたえ〴〵ながら通路たえず。文雄は學士と成りてより、教師に、官所に、招聘のあまたありしが、皆辭みて受けず。獨り書齋にのみ閉ぢ籠りて、客人も世のつねのは大方はさけてあはず、しか云ふありさまなれど、春野の訪はるゝ毎には、快よく語りくらして、諸共に書齋に山の端の月を惜しむ事もありたり。

さ云ふ間なれど、朴平の心もよめつらん。おのれが力にては今はせんなき文雄、唯春野にあひて、春野に語らひたらんには、またよき思慮もと、是を賴むのみ。さ云ふ賴みのつなにひかれての花見ならぬ花見。競舟ならぬ競舟見に出でたる朴平が心。花に、水に、何のめでたきあはれうつらむ。堤限りうちわたせど、白雲の襖なす櫻、唯愁色の深くのみ見え、萬枝の紅唇も唯一點の風味だにおぼえず、緑なみより、玉藻ながるゝ隅田川、唯濁水の漫々たるのみにて、一椀のきくすべき滴を見ず。人の舞ふ袖も、人のうたふ聲眞に狂ひたり、ものつきたりとむかりれば見えつらん。朴平が心物あるを見るのみ、あはれも添はず、物も覺えず。さはいへ、あはれを知らざるにあらず。ものゝ心なきにあらず。あはれ朴平、萬胸にもあまる思ひあり。世のつねならぬあはれも知りたり。唯此處にあらぬのみ、ありつゝ此處ならぬのみ、人は知らじな。

枕橋より車をかへして、山なす袖をかきはらひかきわけて、ひたすらに急がんとすれど。狂者は狂もて

たはむれ。痴者は痴もて誘ひ。やは、當年の紅顔子、何が故の哀觀ぞ。君がために養老の水、不老の藥贈らんに、辭み給ふなど、杯をさし出して挑むあり。見かへれど、紅裙を手にしたるあたら青年。あな汚れたりとふりはらひ、ふりはらひ、人の潮に押しながされて、漸くに長命寺の門わたりにとゞまりて見れど、折りもよや、春野が競舟場より出るにあひぬ。誠に文雄も賴みれきたりけむ。春野は朴平を見るより微笑みて、よくぞ來られしと、艇庫のほとりの席に誘ひて、船の名は何々。行路はかなた、决勝點は此方などより、舳にのれるが舵の手などさま〴〵と、ねむごろに教へて、自らは霎時とて立ち去りたり。朴平は主人の事、とみにもうち出でんと思ひしが、そもあまりはなめげなり、しどしはどへてと在る心地もしせぬ席に、花に醉ひ、風に狂ひたる人々と袖をつらねて見るとはすれど、夢の如くにして、こぎはやす船も目には見しながら、形さだかならず。鳴りとゞろかす音樂も、耳にはきこしながら、唯鼓膜にさわぐ音するのみ。春野は再度來りぬ。やは、翁は酒は好まじときゝしが、こは水もたなじ、今しがたうち負けて貰ひたれど、茶の代りに飲みね。こもまた貰ひしなればと、一籠の櫻餅、よからねどかはりの程をと進む心、げに盡くせり。かくても又文雄と春野の間の唯ならぬ深さは知れなむ。朴平は厚きもてなしに、結髮の頭しもたげず、文雄の事賴みきこえんと思へど、あたりの人の去げきを憚りて、うち出でず。何となういはまほしげなる顔を春野ははやく知りたりけむ、とひかけんとする途端、競舟の念人ならむか、あくまで色黒く、あくまでこえたる男、やは、春野、はや〳〵用意せよ、赤の舵手、そや皆





待ちつ、とく〳〵と聲と共に駈け來りぬ、春野はそやといふまに立ちより、しばしとの一言、なかば殘しつ、わけなきすさびに天地も忘れたるが如し。朴平は何と見るらん。思ふ事はいかに、をかしくや、笑止とろしらもはてんか。いな中々にうらやましく思ふのみ。ねたましうも思ひつらむ。わが思ふ人につけても、文雄の事を思ひつめつゝ。

樂歌とゞろとなりすましたる堤の風、一響の銃聲の霞をやぶると見れば、赤、白、青の旗、互にひらひらと風にまかれつ、まきかへしつ、三艘の船流、わをあらそふかいさき。あはや春野も戲れると思ふに、朴平の心もはじめて外にはあらはれず、春野が舟まばたきもせず、見つめたる。こぶしはいつしかに固くぞ握りたるや。此の競爭は愛嬌の競爭とて、學士の連れなり、樓の上にはわれ知らずハンケチ握りしむる婦人あれば、あはれ龍神、あの船、この水をと人知れぬ胸の祈禱れだやかならぬ令孃もあはれ多からん、學生もわきてうちはやし、見物も何とならうぞよみわたり、吹きたつる樂歌も一入心ありげなり。めざす浮標、いづれもめぐりぬ。此方は彼方より早く、かなたは此方よりはやく、三艇のへさきを揃へぬ。はては進みつ、進まれつ、あな春野の君。君が船と見つめたる朴平。さすがなるものゝえこらへずなりて、いつしかに立ち上りぬ、立ち上りたるも知らず、人を分けつ分けられつ、棧橋の袂。またも一聲霞を破る銃聲、鬨の聲どつと船べりを叩きて水もどよめば、樂歌は曲をつくして雲もさわぎぬ。いづれぞ勝ち、勝ちや誰をと見かへれば、はなやかになびく赤旗、朴平思はず、春野の君目出度やとよべば、春野はこぎ手と共に踊りながらに、輕くゑしやくし

て樓上にのぼりぬ。枝に動く花、風にちるハンケチ七人の男子をふりつゝむもおもしろのさまや。朴平は春野等七人を見おくりて、思ひ到る所はいづれにかある、遂に文雄の上のみ。あはれおもしろの人々、樂しき心や、かゝる中に、もしもわが主のあらむ、文雄主のまさむ、うれしさはこの流れの水もつくすべうあらじ。よしや勝ちたらん群にもあらず、負けにけむ船にありとて、何の悲しき事あらん今の悲しみにくらべんに、悦びのはてぞ。はてなきものは悲しみぞ。さても書齋の毒氣、あたら玉の緒のよわるも知らでやれはする、心細さの限りや。あはれ文と云ふもののなき世なりせむ、世のなげきもなからむ、書と云ふもの恨みの限りぞ、我が世の仇ぞと思ひつめてわれともればねず、始皇の世やほししと、無理にして無理ならぬ嘆息。いつの間に來りけむ春野。やは、朴平の翁、始皇のとの嘆息も胸中は推し測りぬ。げに文雄殿にも、あまりの書僻、さは今はいはじ、翁、余にまかしてよ、せんすべなからずやは。

人は始終絶はず賢こきものに非す

人は只成長したる小兒のみ

人類は凡て木の葉の如し

人は其好む處を以て信實とす



竹風　近衛忠煕

今年れひの竹のみどりの涼しきに
かぜさへ露をちらしてぞふく

燭影映水　東久世通禧

ひれきりて遊べる魚も見ゆばかり
ともし火わりし池のつりどの

夕水鷄　毛利元德

暮ぬるかやなぎのかげをゆく水に
月見ねそめてくひなゝくなり

深夜鵜河　久我建通

更けゆけば月にやなると山かげの
くらき川瀬にうぶねさすらし

夏月　壬生基修

宵のまと思ひしものをうたゝねの
はしゐにふけぬ夏の夜のつき

螢　長谷信篤

ぬばたまのやみにまよはずとぶ螢
己がひかりやしるべなるらん

夏夕　津輕承昭

山かげのならの葉わたるゆふ風に
けふも夏をばわすれはてけり

夏露　竹屋光昭

草むらにしげく結べるしらつゆは
わきさく花のいのちなるらん

杜夏草　諏訪忠元

ふみわけて詣づるまでに成にけり
氷川のもりにおふるなつくさ

夏雲　宮地嚴夫

あしたより村雲さわぎけふもまた
夕だちすべく見ゆるそらかな

樹陰螢　内藤存守

飛ぼたるかなたこなたへ移れども
にはの木かげははなれざり鳧

納涼　三浦千春

庭草にみづうちそゝぎはしゐして
かぜまちをれば月は出にけり

浪　師岡正胤

わしが木にいざよふ浪も海にいづ
人のゆくへやいづこなるらん

夏月　林甕臣

あつしとて雨戸をはらひ開けすてゝ
ねたる夜なかの蚊やどしの月

海邊月　三輪義方

はるかなる沖よりいづる月かげを
きよきなぎさによする浪かな

二荒山のふもとに山うぐひすをきゝて　伊東祐賢

二荒山なくうぐひすのこゑすなり
春はふもとにくれまどふらん

老女對鏡　宇井正夫

かへりこぬ年月なみをわぎもこが
かゞみの影になげきぬるかな

瀧　鈴木伊麻吉

緒のをの清きながれのたきつ瀬は
末くむひともよろづよや經む

夏　岡本秀晴

ことしげき都れは路も日ざかりは
玄ぞしゆきかふ人もたえけり

合歡花　安齋篤敬

夕日影うすくれなゐにさきいでゝ
涼しきものはねむのはながけ

平忠度　松本操

香しき名をぞ千年にとゞめ置きて
須磨の浦わに散るさくらかな

齋藤實盛　木庭芳香

ふりつもる頭のゆきをかくしつゝ
わかきの露と消ゆるあわれさ

山家夏　蜂須賀隨子

山の井の水にこゝろをうつしつゝ
すむべき夏になりにけるかな

海邊郭公　前田朗子

風なぎてなみ靜なるゆふぐれに
うらづたひして鳴ほとゝぎす

覊中山　柳原愛子

故郷のやま見ねしよりなか〳〵に
たび路なかくもれもはゆる哉

梅雨晴　小池道子

さみだれの晴たる空のあさづく日
出てあふがぬひとなかりけり

湊川懷古　下田歌子

みなと川みづはかれても天つちに
君がまことはあふれけるかな

窓前螢　　松平健子

ともし火を吹きけつ窓のゆふ風に
　かはるひかりはほたるなり鳬

樹陰水　　保科節子

生ひしげる木末うつりて此の頃は
　みどりになりぬ谷のしたみづ

田上螢　　日野西廣子

早苗とる賤はかへりし小やま田の
　みづかげ暮てほたるとぶなり

避暑　　鶴久子

こゝにしてひと日くらさん隅田川
　風ふきとほすきしのたかどの

夕立　　三宅龍子

やよやとく雨戸くり出せなる神の
　音すさまじくあめはふりきぬ

里蚊遣火　　諏訪晴子

ゆあみして涼む夕べはかやり火の
　けぶりのたゝぬ里なかりけり

松下掬水　　清水ゑづ子

掬ぶ手もこほるゞかりに涼しきは
　松の木かげのいさらゐのみづ

をとめ見て心うごく　　林甕臣

きのふまで肩上げの衣きて、學校へ通ひし女の子、けふ見れど、嬰兒いだきかゝへて立てり。他人の兒を守りするにこそ。とおもへるに、やがて脹らかなる乳房むねあらはに出だしかけて、含ませをるよ。あきれたり。おのが產めりし兒なめりかし。年齡は、いくつにか。きのふまで頰ゆたかに、つぶ〳〵と肥えふと

りたりしを、けふ見れど、あさましう痩せさらぼひて、顔あをざめたり。

智育とて、心の發達を促がさるゝにつれ、さる方の情も、ともに發達して、おのづと、その期をはやむるにもや。女學校の學科、うたて、おはきに失へるだにあるを、たらちねの、おやから、いとすこやかに產みあたへられたる身體、もの學びのために弱うしたりつるだにあるを、おまけに早婚の弊、この弊、女子一身の不幸に止まらず。小は、一家にかゝり、大は一國におよぶ。

そもそも軍の陣にのぞむ將校士卒は、みな女の、產めるなり。母體の強弱は、その子に遺傳す。體格の大小は、その母體に比準す。

敎育家、女子を敎育せんとならば、女子の、國家に對するの本分を失らしむるなかれ。女子の、人の母たるの任務を闕かしむるなかれ、あゝ早婚の弊、女學の弊。

よきことに
まがことさいつぎ
まがことは
よきことさいつぐ
世のなかのみち

雜録

●御救恤金御下賜　三陸地方のいましき海嘯に引きつゞきて、又も、はかなき狀を現しゝは、新潟、岐阜、長野、石川、富山各縣下の水害にこそ。この罹災者中には、親を亡ひたるものあり、はらからのうせたるもあり、或は、家を流され、或は、田圃を荒らされて、其の生業を失ひしも、また、甚多し。かゝる慘狀畏くも　兩陛下の聖聞に達し、新潟縣へ、金二千圓、岐阜縣へ、金三千圓、長野縣へ、金千圓、石川縣へ、金二百圓、富山縣へ、金千圓下賜わらせられ、救恤の補助に充つべき旨、各縣下へ達せられたり。被害地の民はもとより、これを承りまつるもの、誰か　兩陛下の御仁德の忝なさに感泣せざるものあらんや。

●東京府高等女學校の名譽　去る七月二十日、東京府高等女學校開校式擧行の際、同校生徒の成績品、圖書、習字、裁縫、編物、地圖、作文等を陳列して來賓の縱覽に供せしか、孰れも精巧熟達の評あり。久我府知事は其の中より書四枚、畵三枚を撰擇せられしに、其の書畵は去る八月六日畏くも　皇后陛下の御叡覽を辱ふせりといふ。これ獨り同校生徒の名譽のみならず又學校の光榮之に過ぎざるべし。

さて又左の表を得たれば、そのまゝを、

第一表　現在職員　明治廿九年八月現在

職名	在校年月	受持學級	受持學科	姓名
學校長	一年五ヶ月			谷口留五郎
教諭	二年二ヶ月	補習科	修身、理科、教育、教授法、	岩谷英太郎
仝	六年五ヶ月	四年級	數學、理科	片岡つね
仝	三年十ヶ月	二年級	地理、歴史、理科、教授法、	牧さは
仝	一年五ヶ月	三年級	歴史、理科、國語、教授法、	明石よし
書記兼助教諭心得	三年五ヶ月	一年級	英語	玉井貞也
囑托	三年一ヶ月		圖畫	木元平太郎
仝	三年		漢文、作文	三輪田まさ
仝	二年七ヶ月		習字	山內昇
仝	二年六ヶ月		國語	東宮鐵眞呂
仝	一年十ヶ月		音樂	瀨川さく
仝	九ヶ月		裁縫	北村もと
書記	六年三ヶ月			中山昌生

第二表　生徒增減及卒業生

年月日	現在生	卒業生	補習科卒業生	教員奉職者
明治二十二年六月末日	一二二			
十二月末日	二〇一			
仝二十三年六月末日	二三一			
十二月末日	二一七			
仝二十四年仝	二二七	五三	四五	三二
仝	二四二			
仝二十五年仝	二一二	七二	五二	三〇
仝	二〇三			
仝二十六年仝	一九一	四五	二三	一六
仝	一七六			
仝二十七年仝	二二六	四九	三五	三二
仝	一八七			
仝二十八年仝	二一〇	四三	二二	一八
仝	一九五			
仝二十九年仝	三〇〇			
計		三〇二	一七七	一二八

第三表　生徒出處表　明治二十九年七月二十日現在

北海道廳	七	東京府（市部二〇五　郡部一〇）	二一五
京都府	二	神奈川縣	一〇
兵庫縣	一	新潟縣	五
埼玉縣	七	群馬縣	二
千葉縣	七	茨城縣	六
三重縣	一	愛知縣	四
靜岡縣	三	山梨縣	二
滋賀縣	二	長野縣	四
宮城縣	四	福島縣	六
岩手縣	一	青森縣	三

福井縣	一	富山縣	一
廣島縣	二	德島縣	一
香川縣	二	愛媛縣	一
大分縣	一	熊本縣	一

總計　三〇二

●宮中御歌會　去し五日、宮中に御催しありし御歌會御兼題の御歌は

初秋納涼

更わたるすゞみの床に吹おちぬ
天の川原の秋のはつ風　高崎正風

夏衣またぬきかねてすゞむ哉
まはき花吹秋來ぬれとも　津輕承昭

秋來ぬと思ひながらも蟬のはの
袖吹きかへす風をこそまて　梅溪通善

いつのまに秋の來ぬらん立寄は
吹風すゞし衣手のもり　慈光寺有仲

秋くれどのこる暑に山かげの
去みつを結ぶ夕すゞみかな　清岡長說

初秋の風はふけどもたへがたき
暑にたれもすゞむ頃かな　水野忠敬

夕日かげ入り果しより涼しさの
袖にしらるゝ秋の初風　梅溪通治

ひぐらしの鳴音落來る木の下に
夕風涼し秋や立つらん　小倉文子

隅田川さくらの下葉ちりそめて
すゞむ袂に秋風ぞふく　樹下範子

夏はらへすぎにし後もたゞす川
すゞみの床は賑ひにけり　税所鶴子

すゞみ船かすこそまされ隅田川
いづくか秋のよるせなるらん　小池道子

秋來ぬといふ斗りにて鴨川の
夕すゞみこそ賑ひにけり　町尻量弘

暑けさは昨日の夏にかはらねど
夕へすゞしき松の下風　鈴木重嶺

涼みするにはの淺茅生露みえて
こよひぞ秋の風立ちにける　坂正臣

よもすこし長さ覺えて心地よき
すゞみは秋の立ちてなりけり　小出粲

昨日こそ御祓はせしかたゝす川　清岡長言

のこる暑にすゞみをぞする

晝のまは猶あつけれど夕ぐれの　六條有義
袖にればゆる秋のはつ風

秋のはのそよきゝろめたる秋風を　植松有經
袖にならして涼む頃哉

此ゆふへすゞむ袂に吹き立ちぬ　大口鯛二
またみにしまぬ秋のはつ風

すゞみ船風にまかせてすみだ川　千葉胤明
のこる暑もれもはざりけり

鴨川の河原のすゞみよひ〳〵に　遠山英一
人數へりぬ秋や來ぬらん

●新田義貞と大石良雄　さきに某新聞に、新田義貞の自筆の詩歌なりとて、山口縣大島郡久賀村錨田某秘藏せる由を掲げたり、其詩歌は

槿花一朝雖開眉、思鄕斷腸不待夕　義貞自題
思ひよる身は鎌倉といふ露の
殘る心は朝の下くさ　よし貞

茲に不思議なるは、福井縣三國港眞言宗性海寺に傳へる什寶に、大石良雄の辭世と云へるものあり、曰く

槿花一朝雖開眉、思鄕斷腸不待夕
思ひ入る身は武藏野と夕露の　大石內藏助花押
殘る心は朝野下草

詩は双方とも一字一句も異なる點を見ず、唯だ歌句中に、思ひよるを思ひ入るとなし、鎌倉を武藏野となせり。而して一は肖像の上に自筆を以て詩歌を書し、一は自から尾花の如き草類を書きて其上に詩歌を書したるものなりと。良雄、義貞の句を剽竊したるか、後人良雄の句を竊んで義貞の作としたるか、將た兩者とも眞を失へるものか、未だ遽かに斷じ難しと雖も、世傳ふる所の寶物什器なるもの往々此類の事あるこそ怪しけれと每日新聞に見ゆ。

●當代の歌仙日蝕を詠ず　八月九日例の友たちまとゐしけるに、折から日蝕なれぞれの〳〵當座によ

める。

天照らす神のみかげも時として　鈴木重嶺
ひかりを月にゆづりますらむ

黒染のゆふべになれるこゝちして　先光清風
ほそりにけりな天つ日の影

立出て見るもかしこし時のまに　梅村宣雄
ひかりうしなふ天つ日の影

隈もなく天照らします日影にも　香取大作
月のさはりのあるよなりけり

天つ日の光かくるゝことわりは　安東菊子
知もしらぬもあふくけふかな

日の御影有か無かになりたれど　長瀬鏡子
さすがに夜とはおもはざりけり

はれわたる日影を見れど千早ふる　山井景建
神代を今もおもほゆるかな

天つ日の光さゝへてしむらくは　松村由長
こゝろぼそくもおもほゆるかな

にはかにも暮る空かとおもひけり　加藤安彦
日は見ねながら影のてらさぬ

●孝子　家貧にして孝子出づれど、家富みて孝子の顯はるゝもの少なし、茲に丹波國船井郡八木村に、八木かう（現齡十九年）仝龍三郎（現齡十四年）なる姉弟あり、身實に中等以上の富家に生れ、孝心の深きこと類ひ稀なるものなり。一家祖母兩親合せて五人母は明治十四年以來重病にかゝり、四肢全く不隨となり、常に病褥にあり、父は農樵の業に餘念なく、祖母は一家の裁縫に從事せり。かう女七歳にして八木尋常小學校に入り十二歳にして卒業し、退學の後は、一家の炊事を一身に引き受け、特に母親の三度の食事を初め、萬般の世話介抱

に至るまで、孝養至らざるなく、十六年間一日の如く、更に倦怠の色なし、かう女思ふやう、裁縫は女子第一の務なれど、何とかして學びたし、されど、われもし家にあらざれば、病母の介抱と、一家の炊事とをなすものなきを如何にせんとて、已が志望をいひいは兼ね、其儘月日を經過せり。

或日、父、かう女に向ひいひけるは、汝も既に成長したれど、裁縫の業を知らざるべからず、われ近日より此の道の師匠某氏へ通學せしめんと欲すと、かう女豫て心に願へることなれど大に喜び、これより毎朝未明に起き、炊事より掃除萬端に至るまで細大漏さず、一日の分を成し了へ、師匠の許に通學しけるに嘗て他生徒に遅れしことなく、一心勉勵なしける程に、其の業大に上達せりといふ。

龍三郎に七歳にして八木尋常小學校に入り、十一歳にして卒業し、現に青戸高等小學校第四年級にあり、質性温厚篤實品行方正學業優等にして、八木尋常小學校に於ては、常に模範生たりき、特に感ずべきは、學校より歸宅すれど、直に母の病床に就き機嫌を伺ひ、次ぎに其の日學ひたる課業の事就中脩身の談話を初め、世間の出來事の耳にせしは細大漏さず話し聞かすを一の課業の如くすること、入學の初より今日に至るまで、八年一日も違ひたる事なし、母は長の月日病床にありて一切他の樂みなけれとも、唯龍三郎の學校より歸り來り美しき顏色もて話し呉るるを此の上なき樂とし暮せるなり。されど、少しく歸宅の遅きことあれど、非常にまちかぬるなり、かくの如き孝子なれど、母の慈愛の深きこと中々筆紙の盡すべき所にあらず、然れども慈愛餘りて返りて課業を欠かしむることなきにあらず、またこれ女性

のしからしむる所止むを得ざるなり。即ち龍三郎の當時通學せる青戸高等小學校は居宅より相距たること十八町許、途中大堀河あり、一昨年此こに長橋を架したれども、雨降る日風吹く時は、母は龍三郎の身に恙あらんことを憂ひ快よく出校せしめず、龍三郎は課業の後れんことを厭へど、母の病氣をまさんことを恐れ、強て乞ひかね、時に欠席をなすことあり。

龍三郎嘗て父にいへるやう、姉既に長ぜられたれど、遠からず何方へか嫁せざるべからず、費金の用意ありやと、父は少年に似げなき問と、已れが用意なきとに驚き、且つ恥ちいへるやう、其の用意なし、如何にして費用を作るべきが、汝其の方法を考へよと、數日を經て龍三郎答へける樣、父の財産は行く末兒に讓與さるゝものなれども、兒獨り私しすべきにあらず、願くは持山某所の材木を以て姉の婚儀費に充てんと、父大に其の志を賞し、姉また深く弟の情を喜びぬ。姉弟の情義概ねかくの如し、他は推して知るべし。

龍三郎、昨年五月父と出京し、内國勸業博覽會を縱覽し、歸途父は龍三郎を思ひ、京都より乘車せんといへるを龍三郎は押し止め、父は乘車せらるべし、兒は龜岡まで徒歩し、足若し疲るれど乘車すべしとて、遂に共に龜岡まで徒歩し、それより歸り車を求めしに、折節一輛もなし、龍三郎いへる樣、歸り車のなきは却りて節儉の幸なりとて、遂に全く徒歩歸宅せり、以て其の勤儉を見るべし。

本年一月元旦のことなりと龍三郎祖母に勸めける樣、今日の如き暖かき晴天は、近年稀なる元旦なりいざ御身に供して氏神に參詣せんと、祖母大に喜び

衣服を着替へんとしけるに、折節から女の不在なりけれど、其の入れ所を知らず、止むを得ず明日にせんといひけれど、龍三郎衣服の善惡は論ずるに足らず、此の好天氣明日また如何に變ずるやも計られずといへり、祖母も其の意に從ひ參詣せり、祖母常に人に語りて曰く、わが畢生の快事此に如くものなしと、其の他此の姉弟はいまた嘗て祖母より先きに浴したることなしと、祖母に對する情の切なる一家禮讓に厚きを知るべし。

病母嘗て人に語りて曰く、吾が身貧家にありし日、克く父母に孝養を盡したれども、今わが子二人がわれに盡す孝養の厚きには及ばざりきと。嗚呼世間衣食足れる母をして此の言を發せしむるもの幾人かある。

以上は、八木尋常小學校訓導秋田玄之助氏が、修身科に於て生徒に說話せられしを余が傍聽筆記したるものにて、眞に此の二孝子が善行の一分に過ぎず。また決して實際を修飾したるものにあらさるなり、余は實に船井郡にかゝる孝子の出でたるを喜び、且つは之を敎育せられたる八木尋常小學校訓導諸氏の功蹟を稱揚感謝せさるを得さるなり。（京都府敎育會雜誌）

●臺灣學生の赤穗義士談　去六月二十七日、臺北縣立日本語學校卒業式を擧行せり。卒業生蔡啓明、施騰輝、倪希昶の三氏、相對し日本語を以て、赤穗義士の事蹟を談話せりといふ其談話を記さん、

赤穗義士

倪　汝は此に澤山掛けてある畫を何んと思ひますか。

蔡　これは、日本にて敎授用に致します歷史畫と申

しまして、古代より近世に至るまでの歷史中に就いて重もなるものを、容易く知らしむる爲め描きて生徒に教ふるもので御座ります。

施　汝は此の歷史畫の中に就いて感じたことが御坐りますか。

倪　私は實に此の畫を見て、日本には澤山に私共の御手本と致すことが御座りますと思ひます。

施　さうです、私も左樣思ひますが、何を一番御感心なさいましたか。

蔡　どれと申すことが出來ませんが、先生の御話を承はると、あの大石良雄等が吉良上野介を打つた事かと思ひます、御覽なさい、此に掛けてある此の圖の事で御座います、なぜと申すと、此の事柄は支那にも聞えて、種々の書物に此の話を大層譽めて書いてありますし、亦西洋各國にても、此の事柄を飜譯して、彼國にて非常に感心し、日本は實に他國の人になき美質を持つて居ると云ふとか聞いて居りますからです。

倪　さうですか、どうぞ一應其の御話御聞かせ下さる樣願ひます。

蔡　私はまだ日本語が充分に出來ませんで、漸く半年ばかりの間先生の御蔭で少し位眞似方が出來る樣になりましたのですから、中々御話を致すことが出來ませんが、少しばかり先生より伺ひましたのを摘んで御話し致しましせう、どうぞ話し方のをかしき處は御許を願ひます。

さて此の事柄は、日本にては五六歳の子供にても知りて居ります、さうですが、つまり大石等の主人なる淺野内匠頭と申す人が、殿中で、吉良上野と申す人から非常に惡るく言はれたる

故、之を遺憾とし打たんと致しました故、公儀の命令で淺野は切腹致すこととなりました、夫れ故淺野の家來なる大石等は、主人の讐を報せん爲め、永の年月辛き目を致して、漸く吉良を打つたのであります。

どうもまだ日本語が充分出來ませんから、申すに甚た困しう御座りますから、どうか此の次は汝が御話になる樣願ひます。

それでは私も能く覺えて居りませんけれども申して見ませう、さて此の時の法律として、人を殺したものは殺されると云ふことですから、大石始め四十七人のものは、皆切腹を致すことなりて、立派に死んださうです、實に自分の死をも恐れずして、我が主の爲めに忠義を致す心根は、感心の事と存じます。

施 實にさうです、此の事柄が西洋や支那までも聞えて居るとは無理のないこと丶思ひます、そうして日本では、今でも此の事柄を忠臣藏と申して芝居に致し居るさうです。

倪 成程左樣で御座います、其の上此の人共の御墓には、香花が常に絶えたことがないばかりでなく、外國人の日本へ參りますものは、多く此の墓に參詣致すさうで御座います。なんと名譽のことでは御座りませんか。

蔡 さうですとも、實に感心のことでございます。私共は昨年より御一緒に日本語を稽古致して居りますし、眞實の日本人になりたいと思ひて居りますから、是非一度日本へ參りたいと思ひますが、其の時は必ず此の人々の御墓へ參詣致す積りて御座ります。

施　私も日本へ參りました時は、屹度參詣致す積りで御座いますが、汝は此の御墓は何處に在るか御存じて御座いますか。

蔡　何んでも東京の芝高輪と申す處に在るさうですが委しきことは能く存じません故、是から先生の處へ伺ひまして承らうでは御座いませんか。

倪施　それでは之から御一緒に參りませう。

●世界第一の長壽者　何人か世界第一の長壽者なるとの問に答へて、或人は露國の老人百六十歳のものあるを擧げたり。されど露國の人口調査は極めて不完全にして、且つ人民の生産月日を記錄するものなき故、この言直ちに以て信憑し難し、今ま最とも正確なる長壽者は、亞弗利加に生れたる黑人にて、その名をブルノコトツムと呼び、現にリオテジヤチロに住するもの、本年百五十歳なり。之に次で莫科府の御者クストリンと呼べる丶者百四十歳なり。而して婦人の長壽者百三十歳なるは、黑人にしてボルカリヤに住するものとなす。元來ボルガリヤ及びバルカン半島の諸國は、長壽者を生ずること多く、セルビヤ國には、百歳以上のもの五百七十五名あり。ボルガリヤ國には、同じく三千八百八十三人あり。即ち語を換へて云へば、ボルガリヤ國民千人中に一人の百歳以上のものある割合なりといふ。千八百九十二年のみにても、ボルガリヤ人民百歳以上の死者三百五十人ありて、半島の諸國にては、百歳以上の長壽者も左迄珍らしからずと聞きぬ。

●松樹の天然晴雨計　宮城縣下本吉郡氣仙沼町字南町、越後屋といへる方の庭前に植付ける、高さ一丈計りの松樹は、晴天の前日には必らず松の葉悉く開き、雨天の前日には松の葉皆閉ぢ、曇天の前日

には松の葉牢は開きある由にて、此れ迄の實驗に依れば、毫も誤まりなしと云ふ。此れを天然の晴雨計とも云ふべき乎。

●**普通裁縫書**　島根縣尋常師範學校の裁縫教授錦織竹香女史の著なり。女史は曾て、熊本其の他の諸縣を歷遊し、裁縫教授の方法を視察して大に得る所ありしが、乃ち歸りて、れのが教授案に改良を加へ、舊來の面目一新せりと云ふ。今この一部の裁縫書を著はす。全部を別ちて、前編後編及附錄の三冊とし、前編は專ら教授法の事を記し、後編及附錄は、各種衣類の積り方、裁ち法、縫ひ法等一々圖解を加へて說明せり、文章は最も平易にして說く處亦頗る親切なり。されど一般女子は更なり、裁縫科教授の參考書としては最も適當のものなるべし。（東京同文館發行）

九月兼題

五日
歌……早秋
文……友を悼む詞

廿日
歌……汽車
文……月を見る



八月廿日兼題　寄海祝（天地人秀逸のほかは原稿到着順）

天　愛媛縣松山市本町四丁目　重松たか子

和田のはら廣き波路のはてまても
御世のひかりはみちわたり鬼

地　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

大御代の深きめぐみに和田のはら
わたる舟路もやすけかりけり

人　大坂市西區新町南通り二丁目八十七番地　福島貞子

君が代をなにゝたとへん限りなき
海にもはてのありとれもへは

秀逸（十六首）

限りなき大うなはらのはてまても　田津木久子
ゆきかひやすき君かみよかな

たつなみの音しつまりて四方の海　田邊實子
うらやすらけき君の御代かな

四方の海風しつかなる御代なれや　佐々有鄰子
よのわた波はたつとしもなし

渡津海も行ははてなんはてなきは　川田こう子
わか大君の御代にそありける

大君のふかきめくみにくらふれは　北村てい子
ちひろの海のそこはものかは

君か代をしらぬこゝろに海邊のみ　久松せい子
はてなきものと思ひけるかな

かきりなき大海はらもなにならす　野中ゆき子
きみのめくみの廣きれもへは

天地もかきりしられぬわたつみに　山根久子
君かよはひをたくひてそ見ん

わたのはら波しつかにてもゝ舟の　仁井田とみ子
行きかひやすき君かみよかな

仇波はよそにくだけて日のもとの　小町谷里江子
稜威かゝやくよものうなはら

限りなき大うなはらのはてまても　小野谷園子
なみしつかなる君かみよかな

海といふみのはてまて れは君の　岡本久子
めくみの波はあふれぬるかな

波風もしつまりはてゝわたつみの　甲斐莊ゆふ子
かきりしられぬ君か御代かな

吹く風も枝をならさぬ御代なれは　勝もゝ代子
浪しづかなり四方のうなはら

四方の海なみもしつけき君か世を　荻原しける子
誰かは千代をあふかさらめや

うちわたす青海はらのそこよりも　原いち子
深きは御代のめぐみなりけり

（以下原稿到着順）

和歌の浦なみのしら玉千代八千代　住山靜子
よするやみよのすかたなる闌

わらし波しはの八百路も瀛氣艦の　住山せの子
ゆきかひ繁き御代そたのしき

とつくにの海原かけてはつひかけ　安井章子
旗にかゝやくけふののとけき

海原にくまなくみてるあまつ日の　安井艶子
稜威のなみにうかふからふね

千代へてもきみが惠はそこひなき　冬木わか子
海にまさりてうれしかりけり

大君のふかきめくみにくらふれは　奥原ふく子
ちひろのうみも何にかはせむ

限りなきちひろの海にまさりけり　住山幾子
わかれはきみの深きめくみは

わたの原八重のしほちは風もなく　德永萬壽子
浪もをさまるきみか御代かな

吹きすさむうら風とはく靜まりて　牧野貞子
君かみいつに立つなみもなし

浪かせの治まる御代のうなはらは　牧野雪子
みつきの舟そとしにいやます

よもの海に大ふね小舟かすまして　羽田三緒子
とみさかゆく大やしまくに

日の本のひかりはよもの海にみち　河田いし子
もろこし人もあふくめてたき

治まれる君か御代にはれとたかき　萩原章子
かしまの瀞になみかせもなし

我か國のとみをいかにと人とはゝ　星野弍子

四方の海とそわれはこたへん

千代經へき岸邊の松にこゑそへて　星野仁子
のとけさ見ゆるおきつうな原

海陸のつよきいくさによものうみ　小野田のふ子
うちよせつへきあら浪もなし

ふきあれし風をさまりて四方の海　香川英子
なみ玄つかなる君かみよかな

君か代はうら静かなるわたつ海の　増田すゑ子
千ひろ八千ひろ限りしられす

和田の原よせてはかへるしら浪の　佐々木千鶴子
果しなきこそ世のためしなれ

天津日の照すめくみはわたつ海の　祖山松枝子
はてしら浪にめくりめくれる

限りなきおほうなはらも日の本の　上條よし子
はたのなびかぬ國はあらしな

皇國をめぐるかきほの四方のうみ　及川ちひろ子
なみしつかなる君か御代かな

二見なたはつひかゝやく浪の上に　鮎澤美惠子
君かちとせも見ゆるけふかな

いや深き君かみいつはうなはらや　津田德子
くめとも盡ぬみよにありける

水や空そらや水なるうみのもは　田中りん子
いく千世經たる浪や立つらん

渡津海の鹽の八百路やかきりなき　藤井まつ子
御代は千年のすかたなるらん

はるかなる沖にも波のたとせぬは　半谷いく子
をさまる御代のしるしなり鳧

はてしなき青うなはらの敷なみは　河野たか子
君かめくみのひろきかけかも

にこりなきみよの姿と見ゆるなり　河野さまね子
すみかへりたるよものうな原

わたの原たつ白なみもみねすして　河野やね子
しつけきみよそめてたかり鳧

いく千代も海はらにたつしら浪は　土肥仙子
かはらぬ御世のためしなる覧

君か代をうたふちとりに海はらの　北條桂子
浪もつゝみのれとときこえぬ

西のうみもろこしかけて日の本の　彦坂脩子
君よろつ世といはふたのしさ

千代やちよゆたに治まる大御代は　福原堇子

青うなはらになみかせもなし

青海はらはてのはてまてれは君の
めくみの浪のかゝる御代かな　山本常子

渡津海の浪路とゝもにかきりなき
きみのみいつを仰く御代かな　山本のふ子

天かしたなかとの海にたつなみの
音のとかなるきみか御代かな　北島功子

久かたの雲ゐはるかにわたつみの
はてかきりなき君か御代かな　北島松子

はてしなき大海はらそ千代八千代
榮ゆく御代のたくひなるらん　一番瀬つぎ子

和田の原よする小浪のかず〳〵を
君か八千代にこめてかろへん　佐藤かめを子

治まれる御代の光りにわたつみの
千尋のろこもすみわたりけり　太田たけ子

きみか代は千代萬代もかきりなき
つくしの海にたくひてや見ん　今藤仲子

底ひなきなにはの海もなにならし
君かめくみのふかきおもへは　有坂清子

わたつみの千尋の底もかきりわり　野中あさ子

わか大御代はなににたとへん

はてもなくかきりもなきは海原と
我が大きみのみいつなりけり　靑木春子

底ひなき千ひろの海のろこよりも
ふかきは君かめくみなりけり　眞鍋直子

わたつみの濱のまさこの數よりも
みよの千歳はよまれざりけり　碓井武子

渡津海の八重の鹽路もたひらけく
浪をさまりてくにそにきはふ　碓井信子

日の本のよもをめくれるあら海も
波かせたゝてみよそゆたけき　碓井和歌子

久方のくもゐにまかふわたつみの
かきりしられぬ君かみよかな　武田粲子

和田の原波しつけきはうこきなき
をさまる御代のしるしなりけり　伊東美代子

とし〳〵に千船百ふねかずまして
いやさかゆくしきしまの海　廣瀬きく子

黒けふりみいつの風になひかせて
ちふねのたゆぬ日のもとの海　梨本信子

みつきつむふねもよりきて大君の　磯部つや子

ちよのふしあるたけ志はの浦

よものうみみつはつくとも大君の　西尾　直子
みよは盡せしよろつ世までに

大君のみめくみふかきうなはらに　山田　ふみ子
かめたに祝ふよろつ代までに

うみくさにかゝる惠のつゆふかき　山田　ふさ子
君かみよこそいはへもろひと

かきりなき千里の海のはてまても　小西　琴子
めくみあまねき君か御代かな

あきらかに治まる御代の惠みにや　小西ちやう子
内外のうみになみかせもなし

君か代ははるかにみゆるいせの海　粟田口　信子
志つけきなみの果なかりけり

なみたゝぬ御代にこそあれ海原の　前澤　幸子
ひろきを君かみこゝろにして

大君の御代ののとけきしるしとて　岸　せつ子
なみさへたゝすよもの海はら

君は世はかくころあらぬ量るとも　瀬戸　榮子
はかりつきせし八重の海はら

大きみのめくみも深きよものうみ　廣田　とめ子
れきつ志ら浪たつやともなし

名も志らぬうみの外まて大みよの　水津　すけ子
みいつあふかぬ人なかりけり

よろふへきものこそなけれ渡津海　錦田きくの子
波しつかなるうらやすのくに

八月廿日兼題　臺灣戰記を讀む

地　播磨龍野　眞鍋　直子

かへり見れは、はや一年となりぬる去年、この國にてすら暑にこうしわふる夏のはしめ、支那の地に戰ひ、寒にくるしみし身の、やすむるひまさへなく、ただちにあつさのきはみなる臺灣に渡りて、海に陸に戰ひし軍人連の事をも思出て、その功勞をかきあらはせる臺灣戰記を取りいたしてよみみれは、けにわか軍人のくるしみやいかはかりなりけん、身もこかれんはかりの暑にもたゆます、進みて、道途の險惡なる、糧食を運ふも心のまゝならさる、あるはおそろしき病の爲に、忠勇なるますらをのうはひ去らるゝことの數もしられさる、あるは糧をはこふつはもの、大方は失なはれしなと、よみゆくまゝに、あは

れにかなしき事のみ多きに、かゝるわか軍人連のいたつきの程をもはや忘れて、かはかりのあつさにもこうしはてつゝ、何事もなさぬ身の、今更のやうに、いと口をしうもはつかしうもおもはれてなん。

人

播磨龍野　田津木久子

友の許より、あまたの書をおこせつる中に、臺灣戰記のありけれど、ひらきつゝよみもてゆくに、げにはや一年となりぬることの此頃なりけらし、あだし國國には其ためしもなき、たふとき神の御國の民となりて、神ながらゐます大君の御惠にうるははん、こよなき幸をも有りがたしと思はで、手むかひぬるあだをこらさしめ給ふとて、申すもかしこき御事ながら、竹の御そのふなる尊き御身をすらいとはせ給はで、身もこげたたれんばかりの、あつきかの島に渡らせ給ひ、いくたの艱難をなめさせ給ひて、數たの軍人をあともひ、萬指きなさせ給ふに、我忠勇なるますらをたちの、ます〳〵いさみて進むとはいへども、かゝる暑にはなれざる身のおそろしき病にさへをかされ、あしたに友をはふむりし身の、はや夕へには己が身もまつらるゝといふさまにて、のぞみあるますらたけをゝ、あまた失なひし事の、いとも口をしきに、そこの島人は、いまだ迷のさめずして、土地のけはしきをたのみ、女子幼きものまでも、賊に心を通はして、ます〳〵ひか事のみまさりゆくに、そのくるしみいはんかたなきにも、少しもたゆまず、君の爲國の爲、命もをしまで、遂にそをしづめはて給ひぬる、親王の御いさをはいふも更なり、我軍人の、其いたつき其いさをしを思へど、よみゆくふみも、はふりおつるなみだにしめるはかりになん。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

讀むもいさしく、見るもをゝしきは、是の戰記にあんありける、みづかきの久しきときより、臺灣島の名は、世人のしるところにて、明の末世に、某が國のために心をつくし、よく掟をほどこしてより、今の永福もます〳〵支那の政をとり治めてありけるが、今度皇軍の旅順口威海衛を落しいれつれど、清國王は李氏を使とし、和議のために此島を己が朝廷に奉りてそのしるしとはなしぬ、しかれどもかたくななれど島人は、鉾ゆけ太刀かき、朝夕おそひなやま

して、いとも〳〵皇軍にむかひ奉りしも、北白川宮の御心ひろうにやすに天皇の御心をこゝろとして、夜晝みちびき治めたまひしかど、漸しづまりぬ、ここにひもときて其ゆゑよしうかがひしられぬることは、文の林のかげになんありける、あなゆかしくうるはしき千卷八千卷、みれどもあかぬ双紙なるかな。

及川ちひろ

要害ならひなき平壌の城も、また〳〵くまに攻め落し、その名も、世に流れたるありなれ川も、一夜の中に打ち渡り、駒の跡に滿州のみ雪ふみしだきて、さながら人なき里を行くが如く、さては旅順口威海衛など忽にふみ破りて、もろこし人に鬼神のごとふるひ怖れられたる皇軍の、向ひたらんには、僅かなる臺灣の一孤島、さながら朽木を取りひしぐが如くなるべしとは、我も人も、思ひまうけし所にぞありける、恐らくは打ち向ひし近衛のつはものどもも、又かく思ひしならん、さるを思ひきや、はびこれるしこの醜草、根つよくて、思ひの外なる頑固の抵抗をうけ、あるはけはしき山路に行きなやみて、あたの狙擊に惱まされ、あるは伏兵に圍まれて、糧道をたゝるゝなど、味方の討死、手負も少なからず、あまつさへはげしき暑さに苦しめられ、恐るべき疫病に襲れて、將士、枕をならべて斃れ、いと畏くもいとはしくも大御軍の杖とも柱とも賴みまつれる北白川宮さへ、かくれさせ給ひぬ、されど精兵ならびなしと世にきこえつる近衛のつはものも、攻めあぐみて、はか〴〵しく進み得ずこそきこしめて畏くも大御心をなやませられ、援ひの兵を遣されて、漸くうちきため、まつろひさせ給ひぬ、あはれ如何なれど、先にはさばかり、勇なるものゝ、後にはかくまでおくれつるぞ、近衛のますらをを、よわきによれるか、土匪の勢强きによれるか、あらず油斷てふ大敵に襲はれしが爲のみ、後のこの戰記を讀まんものかんがみでやは。

田中りん子

臺灣戰記をひもときて、一讀しけるに、土民は皆兵にて、いみじう勇氣もまさりて見えけるに土地の氣候はすぐれて熱國にて、一種異風の國なれど、强勇の我國の兵士も、いかでかたへん、今や日本の領分とは成りたれど土民商人のやからも、たやすくは日本に從はんやうもなくや、ともすれ敵たはん心ありとは、

されども數多の年月を重ねて、我が大君の御聖德いや高きをあふぎみては御國の光りに打なびかんことと必定ならめともろの手だてに、數あまたの忠勇武烈の雄の子たちをむさんにこの國の土ともあさんはいとをしむへきことなり、されはとく夷敵もうちたひらぎて國の爲にも成りなんことをいのりぬ。

河野多加子

此頃は、避暑にて、學校も休業せしかど、書店にいたり、臺灣戰記一冊をあがなひ得たり、一日いとまをぬすみ、讀みもて行けど、土匪のしわざのにくさげなる、人少なきを見てはれそひ來たり、鎭めにとて軍人をやれど、四方にちりうせてあとなし、あはれ軍人の力にて、御國に入りしこの島國人も、我大君の深き厚きみめぐみのつゆをかゞふりなど、まつろはぬやからもつひには、よき民となりて、有りがたきみ世の惠みにあくめり。

北村てい子

待ちに待ちにし夏休みとなりぬれは、常は多用の己かみも、何となくつれ〳〵なる物から、此時こそ文の林に分けいりて、せめてはあつさを忘れむやと、あまたの文ひもとける中に、臺灣戰記といふをよみて、覺ゑす落涙にたへす、抑も去年臺灣の亂起るや、忠勇活潑のますらをは、雲霞の如き敵軍を突擊苦戰して、遂に土匪のため空しく怨を呑みて草葉の露と消ゑしもの少なからす、まして恐れ多くも、故北白川宮殿下は、近衛師團長の大任を負はせられ、竹の園生の御身なから、あまたの士卒をひきゐて進軍ましまし、起臥さへ共に哨烟彈雨の中をもいとはせられす、奮戰ましまし、はては余りに難苦を積ませられ、つひに御病にかゝり給ひ、ひとひとて安すらやかに送らせられす、かごにのりてまて進ませられ、今はの御時萬歲の御聲を大空に殘して、あへなく天に登らせ給ふと讀み終りては、くり返しあまりのれんいたはしさに、目もくらみ、しばしは己か身にあらぬ心地そしてかなしかりけり。

佐藤かめを

入相告ぐる山寺の鐘の響も、いつしかしづまりて、こころさみしき夕まぐれ、草の庵を閉ぢこめて、ひとり寢もやらすもの思ふをり、心つくしの秋風は、訪ふ人もなき柴の戸扉を叩き、軒端の桐の葉一ッ二ッ、

友なき宿につれぬ、いとつれ〲〵なるまゝに、燈火をかゝげて、此頃親しき友のもとより送られたる、臺灣戰記てふ書を紐ときぬ、さても臺灣てふ國は、吾が政の下に加はりしかど、未だ御國の露にうるほはぬ野蠻の蜚打ち群れて、いたく皇ら御軍に逆ひぬ、かかるゆゑに、樺山總督、あまたの御軍人を率ゐて彼の地におもむき、屢々戰ひしに、草賊らも死を定めたる事と見ゑ、中々に下らず、勢ひ強く我が皇御軍を惱ましぬ、去れど忠心ふりおこしたる日本男の子の、いかで彼等に屈むべき、やくかと思ふ暑き日も、道のふなれも物ともせず、いかりたけびて日の大御旗を高くかゝげて、ひたすらに君おはす事を覺ゑて我身あるをも打ち忘れ、まめなる心の一すぢに、をたけびふるふ益良雄に勝つべきものあるはべきか、向ふ所破れぬはなく、末終に、敵ども拂ひつくしたることの目出度さよ、あら勇ましの御軍人よ、さは云へど、かく治まるまでは、いくさのため又病の爲に、あたらみ命を失ひつる御軍人を數ゑれずとなん、げに悲しとや云はんくやしとや云はん、中にも花は櫻木人は武士てふ言の葉にも恥ちず、きよくいさぎよく討死したる武士の勇ましさよ、名も香くはしきしきしまの大和男の子と生れ出で、命をすてたるかひあるは、君の爲國の爲ぞかし、九段の坂の靖國のかみのやしろにまつられて、清き御名をぞ後の世にとどめしことのめでたさよ、たゞ口惜くねたましきは、皇國にまつろはぬ奴どもなり、そを思へぞ面影は知るよしもなけれど、妾が伯父なる人も、戊辰の役の戰に出で立ちしに、にくきあだどもの爲に、はかなく討死したまひしときけは、それさへ思い忍ばれて、いとゞ腹立しく、いでや、今より後、我が大君に刄向ふ敵のあらんには、をみなながらもいかでゆるしはすまじと、自ら心もたけり、あるは怒りもして、千々に思ひみだれてありけるに、月もふけゆく小夜中に、古郷いそぐ雁かねならん、空にひゞきて、二聲三こゑ鳴き捨て過ぎぬ哀れ國の爲とは云ひながら、かへらぬ旅路にまかりし軍人の妻の、彼のかりかねを聞きたらむには、いかなる思ひをや起すらむ、いともも悲しくやあるらんと、よそなる時雨に思はず袖をしぼりける。

杉谷正隆編

修身百首

全一冊

菊判美本

近刊

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてそゝの本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

發行所

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

（電話番號一九四六）

國光社

伯爵東久世通禧閲
伯爵副島種臣閲
西澤之助編

高等女學讀本

全部十二冊卷一、二、三、四、(第一、第二、學年用)既刊

高等女學校規程の昨二十八年一月を以て發布せられし以來各地方到る所女學校の新設を見るに至りしは實に女子教育の爲に賀すべきことゝいうべし然るに其の六學年間の教科に充つべき適當なる教科用書の世に乏しきは當路者の常に遺憾とする所にして已むを得ず從來の國文讀本類を斟酌して之を課するもまゝ障礙なき能はず編者こゝに見る所ありてこの書を編し大に其の材料の撰擇に注意し主に婦女子の淑德美風を養成し、兼ねて國語國文の正格なるものを練熟習得し、德行學藝共に其の完全の域に達し良妻賢婦たるの基を固くせしめんことを庶幾したるものなり教育家諸彦乞ふ本編を一閲して女學校國語科の用書に採用せられんことを

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地
(電話番號一九四六)
國光社

女鑑第百拾四號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年八月十九日印刷
同　年八月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏